
幻想キツネが緋弾でありゃりゃ（仮）

道鉄 馬進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想キツネが緋弾でありやりや（仮）

【Nコード】

N7846T

【作者名】

道鋏 馬進

【あらすじ】

これは、ハイライトの消えた瞳が通常運行の主人公が織り成す、キツネで緋弾でファンタジアでもないでもない物語だ。

注意：この物語は面白くありません。面白くなさすぎて、目玉が飛び出る可能性があったりなかったりしないでもないことはない、ことはないので、読む際は両手で目玉をしっかりと抑えながら読んでください。

もしこれで読めるようになったのなら、きっと気になるあの人の服

も透視出来るハズだっ！

キツネが1匹（前書き）

ついやっちやっただ

キツネが1匹

俺が生まれて初めて見たモノは、名前も知らない二人の人間の背中だった。

その背中もすぐに階段の向こうに見えなくなったが、別段気にすることもなく、ここってどこなんだ？と気軽に考えていたりしたら、パラパラと音が鳴りだした。

まだ拙いながらも、よたよたとハイハイで外を見て見れば、頭にぴちぴちと冷たいものが落ちてきた。頭の上は曇り空、どうやら雨らしい。

濡れるのは好きじゃないので、濡れない所に避難する。三段しかない階段を登ると、室内に入る事ができた。

その際、ピリ、と全身が泡立つような感覚に襲われたが、痛いわけでもない。しばらくは不思議そうに自分の体を見ていた赤ん坊はよたよたと奥に行こうとして、歩を止める。

「？」

音が、しない。

雨音が止んだのだ。

先程までパラパラと、耳に心地良い音楽を奏でていたのに、急に、一瞬でその音が止んだ。

摩訶不思議。赤ん坊が楽しそうに、外を見るために後ろを振り向くとそこにはボロボロだった縁側の床が綺麗になっており、その木板の上に人の足が見えた。見上げると、室内、いや、縁側だからまだ

室内ではないが、何故か真っ白な日傘を差した金髪の女性が立っていた。金系のような腰まである髪の上に、硬さのない布で作られた帽子のようなものを被り、紫と白を基調としたドレスを着た女性。その女性のアメジストのような瞳が、冷たく赤ん坊を見降ろす。

「まさか、こんな子どもがこっちに来るなんて」

誰に聞かせるわけでもなく、ぼつりと漏らした言葉。

日傘が、クルリと回る。

女性は数秒ほど悩むように唸ると、結論を出したのか、赤ん坊に手を向けた。差し出したのではない、手の平を赤ん坊に向けたのだ。キュンツと高い音を立て、一瞬で手の平に野球ボール大の光の球体が出来上がる。

手品などではない。その光は高密度のエネルギーを持ち、赤ん坊など一瞬で消し炭に出来得るほどの力を持っている。つまるところ、女性は赤ん坊を殺そうとしているのだ。

なぜ殺すのか。理由など、女性が管理者であるからでしかない。不確定分子は早々に消去させておくに越した事はないのだ。

音もなく光の球体が女性の手の平を離れ、赤ん坊に着弾する。幼い命に対してのせめてもの慈悲なのか、高威力のソレは着弾と同時に赤ん坊の周辺をも巻き込み、土煙に視界が満たされる。

バタバタと暴れるドレスの裾も気にせずに着弾点を見つめていた女性の表情が突如として変わる。

「なっ——！？」

驚愕。

過剰すぎるとも言えた威力。女性は一瞬自分を疑ったが、威力は周りを見れば分かる。ならば、ならば何故？なぜこの赤ん坊は”無傷”なのだ？

そして気付く、この赤ん坊の容姿が、先程とは異なっている事に。

きよとん、とした表情でこちらを見上げる赤ん坊の耳が、人間にはありえない、まるで獣のような、形で言えば猫のような耳になっているのだ。しかし、この耳は猫ではない。なぜ分かるか、それは赤ん坊のお尻を見れば分かる。ひよこり、と耳と同色の、太く黒い尻尾が”4本”あったからだ。

狐。

女性は瞬時に理解した。なぜならその尻尾の形状は、色は違くとも長い間良く見てきた形だったからだ。

そこまで理解して、女性は眉を寄せた。これは……狐憑き？いや、この場合は加護といった方が正しいのだろう。

どうしたものか……。いつそのこと狐であってくれたのなら悩むことはなかった。とりあえず、この赤ん坊を殺すという選択肢は潰えてしまったのだ。ならば外界に送り返すか？だがこんな赤ん坊を送り返したとしても、それは殺す事と同じだ。ここに来たということは、そういうことなのだ。さてさて困った、どうしよう。

日傘をクルクルくりと回し、悩んでいると、くいつと下から服を引っ張られた。思案顔のまま下を見遣ると、先程の赤ん坊がドレスの裾を掴んでいるではないか。

「こら、離しなさい」

「やー」

ふるふると首を横に振って、更に強く搦んでくる。

この女性は人間よりも力が強い、人間ではないのだから。だからちよつと力を込めればソレの子どもなんか容易く振り払えるのだが、どうにもそういった気分になれない。

そんな自分に内心首を傾げながらも、しゃがみ込んで赤ん坊の頭を撫でてやる。すると、にぱー！とまるで華が咲くかのような笑顔が浮かべてくるではないか。

「はうつ……！！」

ドキュンッ！ 打ち抜かれた。スナイプされた。一撃で突破された。

なんとという笑顔っ！反則、チートなどと言われてきた彼女だが、この笑顔こそが反則であり、チートであろうと思わずには居られなかった。この笑顔の前では美の女神だって裸足で逃げ出さるだろう。そして嫉妬に狂って殺しに来そうだ。

「む…？」

殺しに来る？それではダメではないか。もし殺されてしまったら、もうこの笑顔が見れない。それは嫌だ。よし、なら殺しに来た女神を殺してやるうじゃないか。

はてさて、どうやって殺してやるうか？この子にはそんな惨い所を見せたくないから、その時は藍らんに任せよう。たぶん神を殺す事は出来ないが、弱らせることなら出来るハズだ、そこを自分がズドンとやってやるう。

「紫様、どうされましたか…って子ども？」

突如、くぱぁ…という効果音と共に濃い藍色と白の民族衣装のようなものを着た、金髪の、やけに後ろがモフイ女性が裂けた空間から現れる。

女性は、赤ん坊を視界に入れると、素っ頓狂な声をあげ、自分の主人の目の前に居ることと困惑した表情をより一層深めた。

「ええ、そうよ。ねえこの子可愛いと思わない？可愛いわよね。もうダメだわ、この子連れて帰る」

「ええ！？ダメですよそんな事っ！」

「カタい事言わないの。それにこの子も一応は狐だから、貴女にちよつと見てもらいたくてね」

「は、はぁ…」

「まあそついうことよ」

ひょいと赤ん坊を抱き上げた、紫と呼ばれた女性は自分の式である藍に赤ん坊を見せつけるように体ごと振り返ってから、日傘を藍が出てきた”スキマ”に放り投げると、自分も赤ん坊を愛おしそうに抱いたままスキマに入っていく。

従者は、主人に着いて行く前に無惨にも破壊された神社の縁側を見てため息をひとつ吐いてから、自分もスキマに滑り込んだ。

「くぁ…っ」

朝。気だるい朝。登校がこれ上ないほどに面倒臭い朝。自殺するなら、社会へのせめてもの抵抗として今日死にたいと思うそんな朝。即ち月曜日に、この物語の主人公は今にも自殺しそうな程に活力のない、というかハイライトの消えた瞳で登校していた。恐らく、今彼に遭遇してしまった不幸な人がいるとするならば、例外なく何らかのアクションをとるだろう。素通りは、スルー検定一級所持者でもなければ無理なほどの難易度。

「ひっ…！」

少し前方で、自転車を押して男子寮の門から出ようとしていた男子が喉が引き攣ったような短い悲鳴をあげて全速力で逃げて行った。可哀想に。

はてさて、とりあえずはこの目からハイライトの消え失せた主人公を紹介しようと思う。

この主人公の名前は望月 モチツキ・サクヤ 朔夜、性別は男。東京武偵高の二年A組、超能力捜査研究科、通称SSR所属で武偵ランクはD。優秀ではない。まあ、今の主人公の顔を見ればやる気がこれでもかっ！というほど見えないので、致し方ないことなのかもしれないが。

「はぁ…」

茶色いプラスチックフレームのメガネを左手で力チャ力チャと弄りながら、右手の腕時計を見る。時刻は8時02分。

さっきの男子生徒みたいにチャリでも持っていれば間にあったかもしれないが、生憎と主人公はそんなもの持ち合わせていない。走っても遅刻確定。しかし主人公こと朔夜は焦ってさえもいなかった。別に車が来て送ってくれるわけでもない、ただ遅刻しても気にしないだけである。不真面目、というわけではない。というか不真面目という次元を超越しているのが朔夜だ。

授業の時間を屋上で潰すのは当たり前だし、任務も滅多に受けない。そして、それ以前に学校に行くこと自体が珍しいという、半ヒッキーくんだ。

しかしながらそんなヒッキーくんもここ最近はきちんと学校に行っている。理由は単純、彼の家族に「行け」と目が笑っていない笑顔で言われたからだ。「なんのために外に出したと思ってるの」とも言われた。確か見聞を広めてこいとは言われたが、その際に朔夜自身の了承はなかった。

つまるところ、行きたくもないのに尻を蹴られて追い出され、挙句の果てには勝手に入学手続きを済ませられており、「卒業するまで帰ってくるな！…あ、やっぱり夏休みとかは帰って来て！帰って来ないとこっちから行くからねっ！？」である。その際の、もう一人の姉からのありがたい御言葉が「一度、勝手に外に出て行っただけだ。しかもずいぶんと有名な組織に入っていたらしいじゃないか、だから大丈夫さ」だ。まだ根に持ってたのか…、口にはしないけど埋められるからな。

つつわけで、捨てられた俺を育ててくれた恩があるとはいえ、あんまりではないか。というわけだ。

「はあ…」

そういえば今日は始業式だったわけ。うわ、超帰りてえ。

思い出し、更にげんなりしながらも歩いていると、やや遠くで爆発音。しかし朔夜は気にしない。爆発音なんて、朔夜の家族がいる所では当たり前、日常茶飯事だ。なによりたかだか爆発音でビビっているくらいでは生きていけない場所だったし、いきなり目の前が光で埋め尽くされるなんていうのもザラだった。

故に、朔夜は爆発音の方向を一瞥しただけで、歩調を一切乱すこともなく二年A組の教室に向かうのであった。

厄日だ。絶対に今日は厄日だ、そうに決まってる。

遠山キンジは頭を抱えながらそう心中で叫んだ。

朝、顔は良いのに目が病んでる女を見たかと思ったらチャリに爆弾が仕掛けられてるし、ついでにUZI付きのセグウェイに追い回されて、終いにはヒステリアモードになっちまうし、本っ当に、今日は厄日としか思えんぞ。

厄日回避のために、最近有名なオカルトショップでお守りでも買ってみるか？

最近、といってもここ一年ほどらしいが、なんでもそれなりの金を

出せば除霊から呪いまでやってくれるんだとか。その他にも魔除け道具やらなんやらとそういう道具も売っているらしいから、ひとつくらい不幸から守ってくれるお守りでもありそうなものだ。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

「…は？」

ぼんやりと眺めていた壇上の、なんか見たことあるちっこいのがこっちを指差して宣言するかのように言い放った。

考え事の最中だった所為もあって口が勝手に声を発したが、それは、わあーっ！というクラスメイト達の声に掻き消されてしまった。

というか何がどうなって今の状況に？待て待て、少し考えさせてくれ……。よし、さっぱり分からん！

「な、なんでだよ…！」

やっとのことで絞り出した声は、はたして聞こえなかったのだろうか。隣の席に座っていた身長190近いツンツン頭の友人、武藤剛気が俺の手を選挙に当選した代議士の秘書みたいにブンブン振りながらなんとか言っていたが、それこそ俺の耳には届いていなかった。なぜか？それは俺にも分からんが、なんだか人生という階段を転げ落ちているかのような感覚に襲われたのは確かだった。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤くん、席代わってあげて」

「了解っす！」

わーわーぱちぱち。と武藤が移動している間にクラスメイト達は拍手喝采を始めてしまった。

そこでハッとなった俺はなんとか弁解をしようとするが、どう説明

すればいいのか分からない。とにかくあのちっこいのが銃をぶつ放しまくる凶暴女だというのは分かるのだが、それをどう説明すればこの教室の無駄に上がったテンションを落ち着かせられるんだ！？

「キンジ、これ。さっきのベルト」

思考を止めないまま、ひょいと放り投げてきたベルトを難無くキャッチする。

ああ、こんなところにまで強襲科のクセが染み付いているのか。何故だろう？今日はなんだか、テンションが右膝下がりの気がする。

追い打ちのような、ガタツ！と左隣の峰理子が立ちあがった音を聞いて、俺は無意識のうちに聴覚を遮断することを選んだらしく、机にへたり込んだ。もう、勘弁してくれ。

ずぎゅぎゅん！鳴り響いた二発の銃声が、教室を凍り付かせた。そして俺の現実逃避が強制終了させられた。

なんだなんだ、と音源を見遣れば、真っ赤になったアリアが二丁のガバメントが天井に向けられていた。

「れ、恋愛だなんて…くっだらない！」

空薬莢が床に落ち、静けさを際立たせる。ふいに聞こえた「すう…、すう…」という呼吸音らしきものが聞こえ、チラリと斜め後ろの席を見遣ると、

「っ！」

アイツがいた。朝、男子寮を出るときに目が合ってしまった、葉でもキメてるんじゃないかってくらいヤバイ目をした女が寝ていた。

てかなんでこんな状況で寝れるんだよっ！？

俺が女を見ている間、つまりしばしの静寂に、理子が奇妙なパースのまま、ず……ずず、と着席、それを合図にしたようにアリアは口を開いた。

「全員覚えておきなさい。そういう馬鹿なこと言う奴には……」

ガチャ。おい、なんで俺に銃口ガバメントを向ける？

「——風穴あけるわよ！」

やめてください。

昼休み。変質者と遭遇した、望月朔夜であった。
もしコイツの効果音が視覚化出来たのだとしたら、コソコソコソという音がコイツの周りを蠢きまくるに違いない。

まあ、俺もコイツも、ここまで人が来るとは思ってもいなかったのだ。だからコイツは屋上にきた女子に驚いて物陰に隠れようとして先に居た俺に驚き、俺は急に現れたコイツに驚き、ついポカンと開けた口が悲鳴をあげようとしたと勘違いされ、今のような状況に陥ったのだろう。

つまるところ、押し倒され、口と右手を両手で抑えられ、残った左手は体を使って抑え込まれるという、なんとも犯罪チックなことをされているのだ。今現在。

「んう。」

「悪いがもう少しだけ大人しくしてくれ。あの女子どもが行ったらずくに離すから」

「ん〜。」

了承の意として頷いてやったら、どうやら安心したようだ。少しだけ拘束が緩む。もしこれが敵ならこの隙にグサツといくのだが、どうにも悪意は感じられないし、されるがままにしておくのが一番楽だ、と判断。欠伸は口を開けないので噛み殺し、目を瞑る。最近になにかと寝不足だったから、寝るまではしないがこうして目を瞑って体力を回復しておかないとマジでぶっ倒れるくらいヤバいのだ。そんな感じで数分もすると、すっと体から重みが消えた。目を開けると、申し訳なさそうな表情の……名前知らんな、そういえば。

「悪い。立てるか？」

手を差し伸べられたので、素直にその手を掴んで立ち上がる。

「それで、変質者はなんのようだ？」

「変質者って……。否定しきれないな、今さっきのじゃあ」

「つか、お前だれ？」

「……一応クラスメイトなんだがな。まあいい、俺の名前は遠山金次インクスタ探偵科で武偵ランクはE」

「ほおん。そっかそっか。でも嘘は好きじゃあない」

「は？」

「能力持ちだろう？お前さん。だからランクEは嘘」

「っ!？」

キンジの顔が引き攣る。更に警戒レベルを一気に引き上げたようで、大きく一歩後ろに下がった。

「…そんなに警戒されると、虐めたくなっちゃうなあ。あはは。

でも、ううん。興味深いなあ。常時発動型じゃあないみたいだし。

なあ、ちよつと使ってみてくれよ」

「ムリだ。それに嘘は吐いてない」

「ムリ？ 自分でも発動の条件を知らないのか？それとも、特殊条件下でないとダメだとか？」

「…ひとつ、いや、ふたつ訊いていいか？」

「いいよ。答える数がふたつなら」

答える数がふたつ。つまり、こちらは黙秘が可能であり、回答する回数が二回ということ。

「お前も俺みたいに不思議な力があるのか？」

「YES。これでひとつ」

「それはどんな？」

「……………」

「じゃあ、そうだな。その力の発動条件は？」

「……………」

「力については答えてくれないか。ならこれなら答えてくれるだろう？」

答えさせる自信があるのか？だけど、それくらいの質問なら自分で調べれば分かるハズ。なのに何故訊いてくるのか。よく分からない奴だ。

「お前の性別は？」

「男。」

「やっぱりか…」

納得顔のキンジ。まあその気持ちは分からんでもない。もし俺がお前なら同じ気持ちだろうからな。

とりあえず、キンジの質問でも分かるように、俺の顔はかなり女っぽい。まず第一にこの腰辺りまで伸ばさせられた髪が原因だろう。小さい頃からよく手入れしてもらったお蔭か、宇宙色^{ソラ}の真黒な髪はそこだけが闇みたいだし。加えて肌は髪と相対するかのような白、病的なまでに白、ついでに毎月送られてくるシャンプーやボディーソープを使っている所為か、妙に瑞々しい。女みたいだと思われるのは面倒臭いが、女っぽくしないで姉さん達に怒られる方がもっと面倒臭いから仕方ない。

「お前、面白そうだな」

言うてから、ハツとする。言うつもりはなかった、いや、それでも言うてしまうほどコイツが面白そうだということか？

しかし良いモノを見つけた。コイツが巻き込むのか巻き込まれるのかは分かんが、きっとコイツの周りは面白くなりそうだ。博麗の巫女の勘とも優らずに劣る俺の勘がそう言うのだから間違いない。

「はは、面白いつもりはないんだがな…。っと、ここで会ったのもなんかの縁だ、メアド交換しとこうぜ？」

「いいよ。ここで会った、よりはここで押し倒した、の方が合つてると思うがな」

「うっ。それは悪いと思ってるさ」

「クク。いいさ、気にしてない。…んじゃ俺はこれで」

「ああ、じゃあな」

「お前こそ。帰りは爆弾に気をつけろよ」

その日、学校も楽しいのかもしれないと初めて思った。

キツネが2匹

八雲邸。

境界の狭間に存在するという、境界の妖怪である八雲 紫とその式と式の式が暮らしている。

外観は日本庭園。広すぎて、簡易式を使わないと家事が一日で終わらないと、藍が迷いの竹林の健康マニアの焼き鳥屋に愚痴りに行く程だ。

そんな広い広い八雲邸のある一室に妖怪とその式がいた。

「藍、どうだった？あの子は」

外界の小難しそうな本をパタンと閉じて、今し方やって来た自分の式神に尋ねる。

「はい。どうやら赤狐^{せきこ}が神格化した天狐^{てんこ}の魂があの子の魂に同化しているようです」

「4尾にしては力が強いと思っていたら、まさか天狐だったなんてねえ。それでどうしてあの子と天狐の魂が同化しているのかしら？」

「それが…不自然なのです」

「不自然？」

「はい、最初は力が弱まった天狐があの子を憑代^{よりしろ}にしたのかと思いますしたが…」

なんと云えばいいのやら、と一度間をおいてから、

「それにしては、天狐の意識が希薄すぎるのです」

「力を取り戻すために眠りに就いたのかもしれないわ」

「いえ、そうだとしても、あまりにも希薄すぎるのです。そしてその希薄な意識も、どうやら自ら融とけるようにしてあの子と合わさるうとしています。文字通り、融合、ですね。あの子が能力を使っている形跡ありませんし」

「そう、もういいわ。下がってちょうだい」

「はっ」

「あ、そうそう。私達があの子に構いすぎて、橙ちえんがヘソを曲げているから構ってやりなさいな」

「…仕方のない子ですね」

「あら、貴女も最初の頃はいつも私の後ろに着いて来てたじゃない」
「……………失礼します」

「あらあら、へそ曲げられちゃった」

ふふふ、と一頻ひとつぎり笑うと、スキマを開き、そこから赤ん坊を抱き上げる。赤ん坊は安心しきった表情で眠っていた。

「私は、人間を食べる妖怪なのよ？」

そう語りかけながら、赤ん坊のふにふにの頬をつつく。

「あ、んむう」

「あら？」

きゅつと見た目よりも強い力でその指が赤ん坊に掴まれた。

「…本当に、可愛いわね。……………そうだ、名前どうしましょう？まだ、八雲の名前は重すぎるし…。そうね、貴方と出会った晩は綺麗な満月だったことだし、苗字は望月。名前は…満月の反対、朔。月のない夜。朔夜なんてどうかしら？ 望月 朔夜。月の満ち欠けが変わらぬように、貴方も時には満ち、時には欠けて、それでも本当の姿

は変わらない。そんな子になりますように、って」

紫は、たった今名を受けた赤ん坊——望月 朔夜を祝福するかのように、そして愛おしそうに、その額に軽く触れる口付けをした。

今宵は更待月。
ふけまちつき

境界の妖怪、八雲 紫が天狐に見初められた人間、望月 朔夜と出会った日の満月が朔に向かって五日目の夜だった。

第二話「友人、宿敵、恋人」

♪夕焼け空が染める街と君の横顔お♪

自分のケイタイから川田まみさんの赤い涙が流れる。あれゝ着信音設定したっけか？まあいいや。ぱかっとケイタイを手首のスナップを利かせて開くと、ついさっき交換したばかりの人物からの電話だった。…これは、さっそく何か起きたのか？

「只今、電話に出ています。ピーという発信音の後に、お名前と御用件をお話し下さい。ファクシミリの方は送信してください」

ぷつ、と切りケイタイをポケットに仕舞う。

「出てんのかよっ!？」

大声のした方を見遣ればあら不思議。そこには武偵高の制服を着た根暗少年の後ろ姿が。その背中は見た者を不幸にさせるといふ曰く付きらしい、因みに本人は24時間364日不幸とのことだ。残った一日で、道端で十円玉を拾う。

「ラッキーがシヨボすぎるっ」

「あ、ああ。と、と……キンジ君じゃあないか。さっき振りだね」
「さっき振りなのに苗字忘れられてるのか？」

「…久方ぶりだね」

「さっき振りだ」

「こまけえヤロウだ。死ねばいいのに」(あはは、そうだったね。

ごめんごめん)」

「…もう何も言わんよ、俺は」

なんだか呆れられた。失礼な野郎だ、足の親指の毛でも抜いてやるうか。地味に痛いよね、アレ。

「それで、キンジ君はなんで俺なんか電話を？性欲でも溜まったのかい？」

「ちよお!？大声でなんてこと言ってんだお前はっ？」

「キミが私をえっちくしたのだろう？時には外で、時には人前で、時には——」

「あゝあゝっ!!お前は俺を社会的に抹殺したいのか!？」

「そうすれば私はキミから解放されるからな」

ひそひそ、やーねー。周りからの視線がキンジを撃ち抜く。俺の性別は男でも、見た目は女だからな、当然の如くキンジに殺意の籠も

った視線が集中している。当のキンジは焦燥感の濃い表情で必死に弁解を模索しているようだ。ふふふ、いいね。そういう顔ってだあいすき！

しかしやりすぎはよくない。というか美味しいモノはゆっくり食べる主義なのだ、俺は。

「と、冗談は置いて」

やや大きめに言ったので、周りの視線が徐々に減っていく。するとキンジは安心したのか、ほっと息を吐き、

「やめてくれよな、本当に。視線だけで死ねるかと思った」

「ん、悪いな。それで用件は？」

「ああ。実は部屋を追い出されちまって」

「…俺との関係性が全く以て、これっぽっちも見えないんだが」

「ああ、いや、ちょっと訊きたいことがあってな」

「ふうん。」

「どうも俺にはチャリジャックの一件からどうも不幸になってる気がしてならない。だからここ一年で有名になってるオカルトショップについて訊きたいんだ」

「藁にも縋る思い、か？」

「そうかもな」

「残念だが、未知の不確定なモノを防げるほどの効果はないよ」

「…は？」

「分からないのか？俺がそうだって言ってるんだよ」

「お前が、なんだって？」

「だから、俺がお前の言ってるオカルトショップの経営者だって」

「……効果はなさそうだな」

「……という意味だコラ。というよりもな、呪^{まじな}いってのは人の願いを少しだけ世界に反映させるための儀式だ。だから強く思えば強く反

映する、狭く深く？ってやつだな。だからお前みたいに広く浅い願
いってのは、大抵意味がない。ほら、幸せになりたいって願った奴
が本当に幸せになるなんて滅多にないだろ？」

「まあ、そうだな」

「つまり俺みたいなのは、医者と同じなんだよ。ただ痛い痛いって
言われても何も出来ない、どこがどのように痛いつて明文化しても
らわないと困るの。分かった？」

「わ、分かった」

「ん、それでよし。キッチンと思いが固まったら、また俺の所におい
でよ。あ、でも祝殺はお断りだからな、あれはしつぺ返しが辛いん
だ。じゃあ俺はこれから晩飯だから」

「時間とらせて悪かった。気を付けて帰れよ」

「ああ、お前みたいにならないようにするさ」

苦虫を噛み潰したかのような表情になったキンジを背中に、朔夜は
いつものスーパーに歩を進めるのだった。

(ノω・ノ) チラッ

久しぶりの激闘の末、あとちょっとで手に入れることが出来た弁当
を思い浮かべながら食べたカップラーメンのゴミを片付け、自室の
ベットに倒れ込んだ。

そういえば、アイツは大丈夫なのだろうか？この前、台所に立てな
いとか、ATMで金を卸せないとか愚痴ってたし、下手すれば干か

らびてるんじゃないだろうか？…まあいいや、死にそうになったら頼ってくるだろう。それ相応の対価は頂くが、助けてやるのも吝かでないし。

大抵は妹を頼るから大丈夫だとは思うが…ううむ、姉らしくしたいとか変なプライド持ってるしなあ。見た目はまんま逆なのだが。中身もまんま逆なのだが。

……やばい、心配になってきたぞ。しかも旅行に行って旅館のお風呂に入ってたら、急に家の鍵閉めたっけ？とかガスの元栓閉めたっけ？とかくらの気になりレベルだ。気になりレベルは夏夜の耳元の蚊よりも2ランク上っ！

あああああ！どうしよう？行くか？行っちゃうか？だけでもう夜だしな。まだ9時ちよい過ぎた辺りだけど。あいつ9時には寝るかな。

ぱかっと、何処からともなく取り出したケイタイを開いてプルプル。

「もしもし？」

『……なんの用ですか、化け狐』

「相も変わらずぶつきらぼうやね。お兄さん困っちゃう」

「もう一度言いましょう。なんの用ですか」

「つれないなあ。ま、いいんだけどね。いやなに、お前さんの姉ちゃんは無事かい？」

「…どういう意味ですか」

「そのまんまの意味さね。俺の勘がお前の姉さんばたんきゅーを告げているわけよ。ほら、アイツって台所立でないじゃん？」

「……………」

「普通ならルームメイトに作ってもらえればいいけどさ、残念な事に俺と同じで一人だろ」

「っ！…失礼します…ッ！！」

「あいあいさ。よろしく頼」

ブツッ！！……せめて最後まで言わせてくれよ。

だがこれで不安はなくなった。あとは風呂入って、歯あ磨いて、髪縛って寝るだけや。

まあしかし、アイツの妹も大変だねえ。がんばってちょ。俺は頑張らないからさ。

ゝ（。、。）ノエへへへ

ばちんっ！と自分の領域^{テリトリー}に異物が入り込んだことを結界が察知、仕込んであった回路に従って霊力が流れ、意識を強制的に覚醒させられる。

「——最悪だ」

最悪だ。自分自身の霊力のクセして寝覚めがこうも最悪になるのだから、もし他人のモノでやろうなら、つい歩行者天国で無双してしまっうほどまで機嫌が悪くなること請け合いだ。

商品にする前に気付けて良かった。まあクレームなんか受け付けないケド。それでも五月蠅い奴はステキな言語で一方的に語り続けてあげるのだ。きつと、いや、間違いなく愉しいことだろう。

だが今は結界に侵入したヤツ——大体、というか確実にアイツなのだが——をお出迎えしなければ。

貞子よろしくの完璧なホラー的這いずりでベットから上半身だけ這い出て、片手で待機させていた簡易式を起動させる。すると、ポンと小気味のいい音を立て、二頭身のやたらデフォルメされた大和撫子^{やまとなで}然の幼女が現れる。しかし旧スク水を着ている。

一応弁解させてもらうと、俺がコイツに旧スク水を着せたわけじゃあない。最初は着物だったハズだ。しかし何故か二回目からは胸に「あずき」と可愛い文字が書かれた旧スク水になっていた。もしかして俺の趣味を式が感じとって、それで……？

「うゝあゝ…とりあえず、頼んだ」

「了解でちっ！」

式がこれまた、やたらと可愛い舌足らずな返事を返し、ぱたと髪を左右に結んでいたゴム紐を体全体を使って取り、ぽんつと先程より小さいがやはり小気味のいい音を立ててその小さな手に櫛^{クシ}を呼び寄せ、癖のついてしまった髪を梳かしていく。

んしょ、んしょ。と背中に乗った式に髪を梳かしてもらっているとがちやりと部屋のドアが開いた。

「あ、また式にそんなことさせて。いつも私がやってあげるって言うてるのに…」

「まあ、それはそれで嬉しいが、」

「ダメでちっ！これはわたたちの仕事でち！」

「…というわけなんでな」

今入って来たのは、蘆^{あしや}屋きよ。彼女はかの有名な安倍清明——彼女

に家に伝わる文献では、実は女性だったらしい——と、そのライバルであった蘆屋道満の子孫だ。ちなみに少し前の夜に電話したのが彼女の妹で、名前は蘆屋燈^{あかり}である。詳細はまた後日としよう。

「しっかしお前さんは相も変わらずちつさいなあ」

「む、でもこの体が朔ちゃんが好きなんですよ？」

「嫌いたあ言わんよ」

そう、驚くべきは先祖なんて些細なことじゃあない。真に驚くべきはその身長。まさかの119cm。幼女である。若しくは小学一年生である。極め付けには声まで舌足らずで拙いもんだから、高校二年生にして言わなければバスを無料で使えるという脅威の御技が可能。

髪の色は藍色でロング。子猫を思わせる瞳は吸い込まれそうな黒だ。ついでに俺の恋人。まあ、外では他人から見たら仲のいい友達以上には見えんと思うがな。

「むふふ、ならこのままでいいのさ。それはそうと、もう起きないと学校に遅刻しちゃうよ？」

「あゝ、今何時だ？」

「7時12分だよ。58分のバスに乗るにしても雨が降ってるから、ちよつと早めに出た方がいいかも」

「…気が利くなあ、お前さんは」

「良妻賢母を目指してるから当然だよ。だから早く賢母にしてくれると嬉しいな。あは」

「はいはい。つと、もういいぞ。ありがとな、あずき」

「はいでち！…あ、えつと。」

「ん？どうした？」

「ええと、出来れば、なんでちが…今度からお休みの日にも呼んで欲しいのでち」

「…そう、だな、いいぞ。だけど、外に行く時は化けるのが必須条件な」

「い、いいんでちか…？わたしから言っておいてはなんでちけど、式をずっと出しておくのはお兄さまが疲れてしまうでち」

「いいんだよ、心配しなくても。大丈夫だから」

「はいでち…。で、ではわたちは戻るでち」

「うん、ご苦労様」

「はわわわ」

頭を撫でてやると、慌てた様子で煙と共に戻って行った。

「さてと、待たせたな、きよ。ってどうした？そんなに頷いて」

「うん、その様子なら子育ては心配ないね！」

「そおさな。で、お前さんはもう飯は食ったのかい？」

「うん、燈がこの前からちよくちよく作り置いといてくれるから。あ、そういえば、ありがとね。燈が朔ちゃんの予想通りって言うてたから」

「ん、まあ、そうさな。まあその話は置いといて、俺は朝飯食わんから後は準備して出るだけだ。リビングで待つてくれ」

「あれ？照れてる？ねえ照れてるの？」

「うっさい。いいからお前さんはテレビでも見てろ」

「にふふ、わかりましたよー。じゃあ終わったら呼んでね？」

「あいあい、分かってるよ」

心底楽しそうに笑うきよをリビングに送りだてから、俺はさっさと学校の支度を済ませた。

「待たせた。行くぞ」

「うん。…んん？ねえ朔ちゃん」

「なんさね」

「もしかして、今日なんかあるの？」

「ああ、たぶんだけど、な。」

「ふうん…。こういう時の朔ちゃんのお勘は総じて良い事がないからな。」

「世の中楽しまなきゃ損だぜ？」

「分かっているけどさー。朔ちゃんなんでも楽しもうとするから…」

きちんと施錠し、口の中で行ってきます、と呟いてから二人は歩を進めた。ふいに見上げた雨雲は、どこか不機嫌そうに涙を流していた。

(* , ω , *) モキユ

『このバスには、爆弾が仕掛けてありやがります』

学校へ向かうバスの中、一人の女子生徒のケイタイからそんな電子歌姫の声が聞こえた。

『これ以上速度を落とすと、爆発しやがります』

どよめく生徒達を後目に、一番後ろの席に座っている朔夜はハイライトの消えた瞳で、しかしひとりだけ愉しそうに口元は綺麗な三日月を描いていた。

そんな朔夜を見たきよはひとつため息を零してから、その小さなあ

んよから靴を脱いで後ろのガラスを覗きこむ。

「わあ、あの車格好良いな〜」

こんな状況でも声に喜色が滲んでいるきよの声に後ろを見れば、そこには座席にUZIが固定され、遠隔操作されたオープンカーが一台。

確かに格好良いけれども、UZIがあるんだから頭を下げておきなさい。大人しく靴を履いて座り直すのを見届けてから、バスの中をざっと見渡す。

一般人は先程のバス停でほとんど降りてしまった事もあって、今乗っている一般人は数人しかない。まあその数人も、1人は運転、残りは頭を守るように屈みこんでいるから、よっぽどの事がなければ死なんだろう。

そして武偵の数は俺ときよを合わせて、定員オーバーの約60人。内3年生は16人、2年生は31人、1年生が13人。先程2年生の一人が全員の専門科目を聞いていたが、こういう事態に慣れている強襲科は半分にも満たなかった。他は一応銃は持っているものの、^{アサルト}ドンパチは苦手な科目ばかりだ。

んで俺達は超能力捜査研究科。通称S研だが、何故かこちらまで訊きに来なかったの言っただけ。きつときよが小さすぎて、このバスジャックに参加させられなかったのだろう。

俺を見たイケメン君の頬が引き攣っていたが、知らないと思ったら知らないのだ。

はてさて、そんなこんなでキンジも被害に遭った『武偵殺し』にバスジャックされてしまった哀れなこのバスは電子歌姫の指示に従っ

て滑らかに都心に向かわせられているようだった。

「早いね。誰だろ？」

追いかけてる奴でもいるんかねえ」

「お？… おおう、なんだもう捕まつてたのか？ そうかそうか。模倣犯だかなんだかは知らんが、まったく、」

「朔ちゃん……」

思ったけどねっ！

地靈殿で思いだったが、さとりとこいしは仲直りしたんだろうか？無理……かなぁ。無意識とはいえ、さとりが楽しみにしてた外界のケーキ食べちゃったし。でも喧嘩は地靈殿が壊れない程度にしておけよ、この前お隣がベロンベロンに酔いながら泣き叫んでたし。修繕の意味がねえええええ！って。

しばらくすると、窓から人が入って来た。元々五月蠅かったのが更に五月蠅くなる。ああ、うぜえ。声帯だけ吹き飛ばしてやろうか？

「朔ちゃん。霊力、漏れ出してるよ」

「おっと、失礼」

霊力。簡単にいえば人間が多用する力のことである。

しかし濃度の濃い霊力は、人間でも精神的負荷が酷い。それこそこういう力に慣れていない人間が1時間も浴びれば精神病棟行きになるほどに。

まあそれ程までに危険だからこそ、人間は自己防衛本能があるのだ。今、俺のまわりで気絶している奴らはその典型的なモンだろう。運が悪い奴なんか、震える自分の体を不思議そうに見ているし。

やりすぎました、ごめんなさい。あつちのこと考えてたから、つい。あはは。

「きゃっ」

きよの短い悲鳴。外のオープンカーが体当たりをかまして来たようだ。その際の衝撃でこちらに転がって来たきよの小さな体を抱きとめ。もう一度バスの中を見渡す。幸い今で怪我をした奴は居ないみたいだな。

…それにしても乗り込んで来たのがキンジとは驚きだ。明らかにEランクの仕事超えてんだろに。もしかしてアレか？お手伝いとかそんな感じ？いやはや、可哀想に……。

「あれ？どうしたの？すっごい楽しそうだよ？」

「おっとつと。こりやまた失礼。それはそうと、」

「——みんな伏せるッ」

またふざけそうになったところで悲鳴じみた声が遮る。反射的に窓の外を見遣ればそこにはあのオープンカーがUZIの銃口をこちらに向けながら並走している所だった。続いて無数の銃弾。

しかも、後ろから前へ舐める様な銃撃。一番後ろに座っている俺達は最も回避が難しい。咄嗟に懷のモノへ手を伸ばし、

小さな火花が10数、咲いた。

「あ、ありがとう」

「いやいや、お礼はジュースでも奢ってくれや」

言いながら、銃弾を逸らした大振りの鉄扇で口元を隠す。黑夜の暗雲に浮かぶ満月の見事としか言いようのない絵は、傷ひとつ付かずにその光沢を保っていた。

ちなみに、口元を扇で隠すのは姉さんの癖が移ってしまったものだ。昔、^{あかり}燈に言われた事があるが、俺が無意識の内に口元をこの鉄扇で隠している時は大方、悪巧みをしている時らしい。言われるまで気付かなかったぜ。

しかしアレだな。今回は俺の勘が外れたらしい。なんたってこれっぽっちも楽しくないからな。

確かに、キンジやらその友人は面白いのだが、如何せんこの事件自体が面白くない。

本で言うならそうだな…。プロローグですらない、みたいな？

その後、爆弾は無事に処理され、バスジャック事件は終わった。

キツネが2匹（後書き）

量についての質問です。

読んでいる方が本当にいるのかは疑問ですが、まあそれは別にいいでしょう。

この小説の文字量は今後増やした方がいいですか？減らした方がいいですか？それともこのままです？

この質問は常時受け付けているので、なにかと宜しくお願いします。

キツネが3匹

——幻想郷。

もはや現代では御伽噺や科学で理論付けされ、その存在意義が奪われた者達が呼び寄せられ、集う場所。

しかし幻想郷にも人間は存在している。幻想だけが幻想郷ではないのだ。

ならばなぜ幻想郷なのか？

それは、人間と人外の共存という幻想を再現した管理者である八雲紫の理想郷であるから。

今、いや、昔から幻想郷は危ういバランスを保ちながらも人間との共存を果たしてきた。そんなバランスを調節している者が幻想郷には主に三種類いる。

ひとつ、幻想郷の立案者でもある八雲紫を始めとしたその式達。

ふたつ、八雲紫の案に賛同した、代々強い霊力とその技術を持って産まれる博麗一族。

みつ、幻想郷中に散らばる、強大な力を持ち、幻想郷という形を正しく理解しているモノ。

ひとつ目と二つ目は言わずもがな、なら分かり難い三つ目を説明しようと思う。

まず強大な力を持つ。

この点についてだが、これは人妖問わずそこらの妖どもをあやかし一蹴出来る程度の力を持っていること。

次に、幻想郷の形を正しく理解しているモノ。

この点は、幻想郷が人外に残されたたったひとつの安息の地であることだ。下っ端妖怪どもは昔のように人間を自分達の餌程度にしか思っていないだろうが、人間ほど人外の天敵は存在しないのだ。自身の存在意義に従って行動する妖怪なんかは特に。

例えば影の中を通って人里近くまで降り、残飯を分けてもらうという妖怪がいた。その妖怪は人間が作り出した真夜中でも煌々と輝き続ける事の出来る電気の光によって人里までの影が失われ、消えた。例えば毒を人間に振り撒く妖怪。その妖怪は振り撒かれる毒の原因が科学的に証明され、毒を奪われ、消えた。

つまるところ、妖怪は人間の心の恐怖があるからこそ存在出来たのだ。

しかし人間は科学を発展させてしまった。科学によってありとあらゆる事象を解き明かし、心の恐怖を、妖怪の存在を消し去った。

妖怪は人間がいなければ存在出来ないが、その反対はありえない。

消えて行く妖怪達。そんな状況に危機感を募らせた八雲紫が作り出した世界。妖怪の理想郷。幻想郷。

古参の妖怪達は知っている。外に出れば、どんな力を持っているにせよ、いずれは消え逝く事を。

そしてこの幻想郷だけが、自身達の存在意義を失くしたとしても、生きていける事を。

幻想郷を正しく理解する者たちは、幻想郷の存亡に関わるようなことは決してしない。それは自身らの首を絞めることと同じであるから。

「——ざつとこんな感じよ」

「へへ。姉さんって、案外凄かったんだねえ」

「ま、紫の普段を知ってるなら、余計にそう思うのも当然かもしれないわね」

ずず、と温くなつたお茶を啜るのは、後頭部に巨大な赤く白いフリル付きのリボンを装着し、何故か肩、というか腋^{わき}が露出する巫女服もどきのような物体を着た少女である。

髪の色は栗色。瞳は黒。歳は14。名は、博霊を継ぐ、博麗霊夢。歳の割に、妙に達観している節があるが、それは朔夜も他人のことは言えないので黙っておく事にした。

これは、幻想郷の管理人、八雲紫に拾われた天狐と完全に同化してしまつた赤ん坊が、11歳になつた年の気温が高くなつてきた頃のお話である。

イエ 、（ 。 ♪ ）人（ 。 ♪ ）ノ イー！！

宴会が多すぎる。煎餅に齧り付きながらそう呟いたのは、毎度の如く面倒臭そうな表情の博麗の巫女こと博麗霊夢であつた。

俺が9歳の頃に起きた紅い霧の異変は知らないが、10歳の頃に起きた遅すぎる春の異変でも今と同じ表情をしていたことから、今回も多分に漏れず異変なのだろう。

「いいじゃん。宴会、楽しいし」

「片付けもしないで帰る奴に言われたくないわ」

「えっ？それが博麗の巫女の仕事でしょ」

「…そうね。表に出なさい」

「ごめんなさい」

齧っていた煎餅を置き、お祓い棒を取り出した霊夢に慌てて謝る。
夢想封印は痛いからイヤだ。

「で、宴会が多すぎるのよ」

「知らんがな」

「というか、なんで三日に一回なのに来れるのよ。暇なの？」

「自分を見ればわかるんじゃない？…というのは冗談でして、」

またお祓い棒に手を伸ばそうとするので、なんとか完璧に誤魔化す。

「みんな暇なんですよ。外界ならそうはいかないけどさ」

「そういえば、この前まで外界まで家出してたんだっけか」

「家出とはなんだ、家出とは。ただ外が見たくなっただけだってば」

「ふうん。まあそんなことはどうでもいいのだけれど」

じゃあ言うなよ。という言葉は飲み込んだ。そこで倒れてる魔理沙
みたいになりたくないし。

「でもおかしいのよ」

「ん？」

「何故だか今回は誰が犯人か分らないの」

「勘が鈍った？」

「ううん。なんて言うのかしら？幻想郷中が怪しいっていうか、そこかしこに犯人がいるみたいな」

「あゝ？よくわからんよ。とりあえず、そこかしこが怪しいってんなら、片っ端から博麗式の尋問でもしてくりやええんでないかえ？」
「……………そう、ね。んじゃあ行ってくるから。その魔女の処分を
お願い」

「粗大ゴミ？」

「生ゴミよ」

冗談にあっけからんと返してきた霊夢は、さっさと飛んで行ってしまった。というか、生ゴミだとしてもバラさないと捨てられないぜ、コレ。っと、違う違う、そうじゃなくて、とりあえずは、

「……………寢室に寝かしとく」

第三話「手紙、再会、旧知」

土曜日、短い針が右より少し上、長い針が真下を向いている深夜。
明日学校がないこともあって少しだけ夜更かしでもしようかと考えている、今日も今日とてハイライトの消えた瞳でぼんやりと壁にかけてある時計を眺める朔夜がそこには居た。

ソファに腰掛ける朔夜の膝の上には式神であるあずきが気持ちよさそうに眠りこけている。そんな式神に視線を戻すと、優しくその黒髪を親指の腹で撫で始めた。

チツチツチ……という時計の規則正しい音と遠くに聞こえる車の音に耳を傾けながら、コーヒーでも淹れるか、とあずきを膝からソファに優しく寝かせて立ち上がるうとした時にその音が朔夜の耳に届いてきた。

コンコン、コンコン。音の発生源である窓を見遣る。そこには予想通りというか、随分と懐かしい式神が居た。窓を開けてやると、輪郭がはっきりとしない白一色の、カラスくらいの大きさの鳥が入ってきた。

そのクチバシに咥えられている、紅い蠟印のされた、貴族のパーティーの招待状のように無駄に高そうな手紙をしゃがんで受け取る。ポンと音を立てて消えて行った式神にお疲れさんと声をかけてから手紙の蠟印を人差し指で弾く。

「ふうむ…」

手紙は友人からのもので、内容は伝えたいことがあるから来てくれとの事だった。

迎えを寄越すとも書いてあるし、手間がかからないなら拒否する理由もない。ので、手紙の一番下に『是』とだけ書いてから、クシャと手の中に丸める。

手紙を手の中で丸めながら足で閉めたばかりの窓を開き、手を広げる。

「行っておいで」

開かれた朔夜の手から、一匹の小鳥が飛び立った。

Σ b (、 ・ ω ・) グッ

夜が明け、待ち合わせ場所に向かった朔夜は高身長のイケメン अच्छきしょうの懐かしい顔があったことに、つい驚いてしまう。そんな朔夜を男はオールバックに整えられた髪を海風から守るように一撫でしながら楽しそうに笑った。

「ひさしぶりだね。朔夜」

「迎えがアンタ直々だとは光栄だな。シャーロック殿」

大仰に胸に右手をあてて礼をとると、楽しそうだった表情から苦笑に変わる。

「相変わらずのようで安心したよ」

「推理でもすれば分かるだろうに」

「結果を知っていたとしても、実物を見たいと思うのが人間だと僕は思うのだからね」

「あゝ、はいはい。そーですねー。んで、俺に伝えたいことってのは何さね？一応イ・ウーは抜けたつもりなんだが」

「いや、それも関係していると言えはしているのだが。そうだね、僕個人からの依頼と受け取ってくれて構わないよ」

「内容と報酬による」

「受け継がれるその時まで、こちらの行動のサポートをして欲しい。報酬は…コレなんてどうだい？」

チャラ…と音を立てながら懷から取り出したのは二本の鎖。しかもその鎖はそれぞれ金属製の腕輪に繋がっている。

あまりのモノに一瞬朔夜の眉がピクリと動く。朔夜はその鎖付きの鈍く銀色に輝く腕輪を見つめながら、自然な動作で鉄扇を広げ、口元を隠した。

「意味がわからん。ソレが、なんだって報酬になる」

「君はこれが喉から手がでるほど欲しいと推理出来ている。どうだい、受ける気にはなったかな？」

「…………質問を変えよう。」

はああ…と深い深いため息を吐いた後、ジト目で、

「八雲を名乗る胡散臭い女性に覚えは？」

「ある、と答えさせてもらおうかな。そう、それと金髪の美しい女性から君への伝言だ。”学ぶなら、傍観するだけではダメよ”。確かに伝えた」

「ああ、そうかい。わかった、わかったよ。その依頼、受けさせてもらおうか」

「それはよかった。それと、これは先に渡しておくよ」

10cm程の二本の鎖を鳴らしながら、幅1cm弱の腕輪が朔夜の手の平に乗せられた。

「？」

「先払いだ。期待しているよ」

「…お前がいつつうんなら貰っておくが、いいのか？」

「なに、君は絶対にやり遂げてくれるさ」

「言っねえ。推理でもしたのかい？」

「いや、ただ友人を信じているだけだよ。それに、もうあの子と会

うまでは推理してしまったからね。君という新要素を加えて推理するの面白いかもしれない」

「その推理の果てに、お前は居るのか？」

「さて、それはどうだろう？ たった今君が加わったのだから、違う未来になるかもしれない」

「…ふうん。なら、また共に酒でも飲める事を祈っているよ」

「ああ、そうだね。僕もそうなれることを祈っている」

その後は、二三言葉を交わした後にシャーロックと別れた。

寮へ帰った朔夜の両手では、鎖付きの腕輪が小さく音を立てていたという。

キツネが3匹（後書き）

文才とかそれ以前に文字を連ねる才能がないことを、より一層思い知らされているような気がしてならない。

キツネが4匹

前回、これから話が始まるぜ的な事を言った様な気もしないでもないのだが、意外にもこの異変は簡単に終わってしまったのだった。

簡潔に今回の異変を述べるならば、酒好きの幼女鬼が、仲間の子達が旧地獄に行ってしまったが故に起こした寂しさを紛らわせるための異変、といった所だろうか。

なぜこの幼女鬼である、外見は耳の少し上から左右に伸びる螺旋を描く二本の角、腰まである長い茶がかったクリーム色の髪を先で一つにまとめた幼女、もとい萃香だけが地上に残ったのかは分からないが、なぜ両腕に鎖付きの腕輪を付けるのかも、服の両肩が破けているのかも分からないが、鬼でも寂しいと思えるのだと、当たり前前のことを再認識できた異変でもあった。

はてさて、そんな異変の元凶がたった今オレの目の前で真昼間から酒の入った紫色の瓢箪をグビグビと傾けている訳だが、如何せん酒臭い。朝起きてから夜眠るまでずっと酒を飲み続けているのだから当たり前と言えは当たり前だが、そんな酒臭い鬼と一緒に暮らしている霊夢には御愁傷様としか言いようがないし、こうして一緒にいる俺もなかなか辛い。臭いだけで酔えそうだ。

しかしだからと言って、

「萃香、酒臭い」

と言っても、

「にやははゝ。そう言わずに朔夜も飲みなつてばあ」

などと言いながら瓢箪片手に襲い掛かってくるものだから、堪ったもんじゃあない。

とりあえず飛びかかって来た萃香を叩き落とし、瓢箪を没収する。後ろで「私を殺す気かあゝっ！」などと聞こえるが、関係ないっただけだ。そもそも酒を飲ませないために瓢箪を鬼の四天王である萃香の手から奪い取ったわけではないのだ。

と言う訳で、俺は知的好奇心を満たすために紫姉さんから借りているスキマ式物置の中から大きめの桶を取り出し、その上で萃香の瓢箪をひっくり返す。

「あ、あ、うあああああつ!？」

スキマから桶を取り出した頃くらいから俺の肩越しに何をするのかを覗いていた萃香の口からまるでこの世の終わりでも見たかのような悲鳴が上がるが気にしない。鬼であるが故の力を遺憾なく発揮して飛び掛かってくるが、即座に萃香を結界で囲って閉じ込め、ついでに妖力も漏れだすように仕様も変更しておく。弱小妖怪なら数分と持たずに消え去るような結界だが、そこはほら、萃香って鬼だから大丈夫。精々力が抜けて腰を抜かす程度だろう。

萃香も必死になって暴れるが、この結界は動けば動くほど妖力を奪う。そのことに気付きながらも萃香は暴れる事を止めない。なんだか結界がミシミシいつてきてる。

「うあああああん! 悪魔っ鬼っ! 私のお酒があああああ!！」

「鬼はお前だバカヤロウ」

「なに!?! 何がしたいっていつのさツ? 私なんか朔夜の嫌がるような事した!?! したなら謝るから返してよう!！」

「うん？いや、別にイヤなことなんてされてないが？」

「ならならどうして!？」

「いやあ、萃香っていつも酒飲んでるけどさ、この瓢箪に酒足してるところって見たことないんだよね」

「えっ…？知らなかったの？ソレには酒虫っていう虫が入ってて、その虫がお酒を勝手に作ってくれるんだよ」

「へえ〜。っと、なんだコレ？…ああ、これが酒虫か。虫…かあ？」

突如、にょろんと出てきたのは5cmくらいの小魚の脇に虫の足が左右あわせて8本生えた魚もどきの虫。魚が白いところも合わせて非常に気色悪い。

そんな気色悪い虫もどきが酒に満たされた桶の中を悠々と泳いでいるのだから尚更だ。

「なあ、萃香」

「うん？」

「この酒虫って、美味しいかな？」

「だ、ダメだよ!？絶対食べさせないよ!？」

「チッ…」

「舌打ち!？」

「ああ、もういいよ。もともと酒ってあんまり好きじゃあないし」

「むむ、それは鬼である私に対しての侮辱と受け取ったよ」

「いやいや、なんでそうなるんだよ」

「鬼〓酒だから」

「そうか？鬼〓宴ってイメージがあるけど」

「ぐっ…。宴〓酒だから宴〓酒〓鬼というわけさっ!」

「はいはい、そうですね!。酒虫も見れたし、もういいよ。ありがとうさん」

結界を解除し、空になった瓢箪を萃香に投げ渡す。萃香は不服なが

らもきちんと瓢箪を受け取り、酒虫の回収に向かった。
酒虫を追いかけるチャプチャプという音を聴きながら、懷から愛用の煙管を取り出し、葉を火皿に詰め、靈力で火を着ける。ぱっぱっぱ、とすするようにしばらく吸っていると、どうやら萃香が酒虫を捕まえたようだ。桶の酒を溢さない様に注意しながらも豪快にがぶ飲みしている。

「ふいー。よくそんな風に飲んでぶっ倒れねえよな」

「そんな歳で煙草吸ってる朔夜には言われたくないよ」

「んだよ。人間じゃあねえんだ、関係なし」

「そついうんじゃなくて、見た目的にアウト」

「…一度鏡見てから言え、酒呑み幼女」

「…まあ、ね。それよりもさ、その煙管大事にしてるよね？」

「ああ。ちつとばかり、外で顔見知った妖怪の爺さんに貰ってね」

「へえ、まだ外にそんな力の強い妖怪が居たんだ」

「…まあ、分かるわな」

ペイツと吸殻を落とし、両端——雁首と吸い口——が銀で、間——羅宇——が朱塗りの煙管を少しだけを頬を緩めながら眺める。

この煙管は煙管作りという趣味を持つ、紀元前から生きている妖怪である爺さんからもらった物だ。あまりにも良い煙管を作ることから煙管妖怪なんて呼ばれていた。なんとも締まらない名前だが、本妖怪？が嬉しそうな顔をしていたからそれでいいのだろう。

そして、この煙管を見ても分かる通り、まるで鮮血で染めたかのような朱色と日本刀のような美しい鋼銀色は魂を抜かれるかと思うほどに絶妙な調和を以って人を魅了する。

それほどまでの煙管に、作り手の力が宿らないはずがない。つまりところ、妖刀ならぬ、妖煙管になってしまったのだ。笑い話にしかならん、と爺さんは苦笑しながらそう言っていた。

萃香が強い妖怪だと分かったのは、特別な素材を使っているわけでもない物に人を狂わせるほどの妖力を染み付かせているからだ。さつきとは真反対の事を言うけれど、物に力が染み付くなんて事は滅多にないから、爺さんの力量も分かるだろう。

「でもさ、そのせいで外界で30分くらい吸つてると強制的に幻想郷に戻されちゃうんだよね」

「ん？外にその煙管を作れるくらい強い妖怪がいるのに、吸っただけでコツチに来ちゃうのか？」

「いんや、どうも一度幻想入りした存在はコツチに引き込まれやすいみたいだね。ずっと外にいる妖怪は自分の意思で決められるけど、俺とか萃香みたいに一度でも幻想入りしたらもうダメだな。弾幕ごつこでもやるものなら、即行でコツチに引き戻される」

「へ。面倒臭い所だね、外界は」

「でも人間が多いからな、楽しいっちゃあ楽しいぞ」

「うーん、でも私はいいや。ちょっと前に紫に連れて行ってもらったけど、ダメダメだね。外は空気が腐ってるよ。酒なんて飲めやしない」

「ま、確かに外は空気が不味いはな。逆に言えば、幻想郷の空気が良過ぎるってのもあるんだろうが」

「いいじゃないか、コツチは酒が美味しく飲めるんだから」

「だねえ」

ぶかあ、と新たに詰めた煙草で煙を燻らせるのだった。

第四話「呼び出し、邪魔者、依頼」

シャーロックから報酬の前払いとして鎖付きの腕輪を受け取ってから数日後。周りの話によると、シャーロックの曾孫である神埼・H・アリアとその下僕こと遠山金次はどうやらハイジャックに遭っていたらしい。

らしい、というのも、その日俺はちつとばかりの調べ物があつたために紅魔館にある大魔法図書館に本を読みに行っていたから分からなかったのだ。きよの話によると、みんなで『空き地島』に集まつて疑似的に滑走路を作りあげたとのことだ。お疲れ様です。

はてさて、そんなこんなにあんなそんなで何の因果か俺は再びシャーロックに、いや、イ・ウーに呼びだされている。ブラドは居ないらしいので、喜んで行かせてもらおう。半殺し程度で根に持ちやがって、しつこいんだよアンチキショウは。

「それで、こんな短期間に二度も呼び付けやがって。学校の方に疑われたらどうしてくれるんだ？」

「安心してくれていいよ、君が疑われることはない。なにせ、このイ・ウーに所属していたことすら極一部の奴等にしかバレていないからね。それもこれも、その狐面のお蔭かな」

ふん、と鼻を鳴らす朱と白の狐面が居るのは、イ・ウー。中身を改造されまくった、行方不明のハズのなんちゃら潜水艦『ボストーク』である。改造されまくったソレは、この広場のように手合わせや会谈が出来るようになってる。

「まあいいさ。それで、ハイジャックの次は何をしてくれるのかな」
「僕の推理に水を差す無粋な輩が現れてね。調べた限り、新しい組織^{ルキ}みたいなんだよ。でもそれにしても粒揃いみたいで、しつこくコチラに介入してこようとしてるみたいなんだよ」

「消せ、つてか？」

「いや、そこまではしなくていいよ。流石の君でも組織ごと潰すのは無理がある。たとえその手枷があろうとね」

「ふうん。んじゃ、なにをしろうと？」

「前のとは別に、イ・ウーとして依頼する。イレギュラーの介入の阻止、または排除を。期間は前と同じ受け継がれるその時まで。報酬は言い値を払おうじゃないか」

ふむ、とあごを擦る。

期間は未定。敵は未知数。しかしシャーロックに粒揃いと言わせるだけの実力集団。最低限、他の組織が互いに互いを警戒し合っている中で、唯一イ・ウーにちよっかいを出せるほど実力はある。面倒臭い依頼だ。断ってもいいが、博麗の巫女に優らずに劣る俺の勘は受けた方が将来的にはいいと言っている。よって、

「いいよ、その依頼受けてあげる。その代わり、報酬は前金で100、後は俺の仕事ぶりですっちが決めてくれ」

「いいのかい？」

「ちゃんと払ってくれると、友人として思っているからな」

「ふふ、そうか。ならばその期待に応えなければならぬ。報酬は弾ませてもらう」

「最後の、言いたかっただけだろ」

「言わないでくれるとありがたかったんだがな」

「知るか」

話が終わった丁度その時、朔夜がここに入って来た時に使った扉が

開かれる。

「紹介しよう。30代目、ジャンヌ・ダルクだ」

入って来たのは銀髪の少女。要所しかない甲冑に身を包んだ、聖剣の少女。サファイアブルーの瞳は銀髪と合わさり、氷のようなイメージを見受ける。

「初めまして、『裏の2番目』^{アナザー・ツー}。紹介を受けた通り、私は30代目ジャンヌ・ダルクだ」

シャーロックどういいうつもりだ？俺にコイツと会わせて何をさせようとしている。

視線を向けるが、ただただ微笑むだけ。話にならない。

「はじめまして。イ・ウーの割には礼儀正しい奴もいたものだ。俺の事は『狐』とでも呼んでくれ。一応表で生きているのでね」

「狐か…、分かった。ではそう呼ばせてもらおう。教授、それで

私は何をすればいい？」

「新たな生徒を攫ってきてもらいたい」

「ふむ…」

「彼女の名前は星伽白雪。東京武偵高2年の超偵だよ。ただし、今回はちよつとだけ僕の指示通りに動いてもらう。なに、大筋だけから君のやり方を曲げさせるものじゃない。それとこの狐は君とは別に、別の相手をしてもらうから気にしなくてもいいよ」

「…分かった」

シャーロックの言葉に、少しだけ訝しそうにこちらを見てから部屋を出て行った。さて、シャーロックが何を考えているかは分からないが、俺も帰らせてもらおうかな。

「そうそう、朔夜。君と同じクラスの峰君だが、一応イ・ウー退学という事になっている」

「ああ、アイツか。なんか怪しかったから警戒してたけど、イ・ウーだったとは驚きだな。まあ、変に峰に接触して首が締まるのは俺だし、放っておくけどいいよな？」

「構わないよ。呼びだしてすまなかったね、イレギュラーさえなければ今回みたいな事はないから、また会うのはもう暫らく経ってからだね」

「その時は上等な酒を用意しておけよ」

「ワインでもいいかな？」

「いいぞ。因みに俺は白ワインが一番好きだ」

「用意しておくよ」

苦笑気味のシャーロックに見送られ、俺はイ・ウーを後にしたのだった。願わくば、筋書き通りになるように、と。

キツネが5匹（前書き）

書き直し、というよりも書き換えになっでもうた。

反省はしていますん。

キツネが5匹

望月朔夜の友好関係は狭い。

幻想郷では八雲一家に博麗霊夢、博麗神社によく来る霧雨魔理沙、紫と仲がいい白玉楼の西行寺幽幽子とその庭師である魂魄妖夢、後は紅魔館組と鬼である伊吹萃香くらいが主だし、外界でも蘆屋きよとその妹の燈とイ・ウーのシャーロックの3人以外は友人ではなくただ外界の存在として扱っている。

故に、この間解決したばかりの迷いの竹林の最奥に棲む月人である八意永琳に二日酔い用の薬を貰ってこい等と言われても対応に困るのだ。どう対応すればいいのかサッパリわからないし。

迷いの竹林の人を迷わせる力は朔夜 능력 によって無効化できるとしても、紫のスキマを拒むほど強力な結界に隔離された空間に行くのは弾幕ごっこがあまり得意ではない朔夜としては何か揉め事が起こってしまった場合、お目当ての薬を見ることがすら出来ずに八雲邸に戻るはめになるのだ。そしてそうなった場合、朔夜はもれなく機嫌が悪くなった紫の手によってスキマ落とされる、落とされたら一週間はまともに感情を顔に出すことが不可能になるほどの折檻を受ける。普通なら薬を持って来れなかったくらいで他人から一週間感情を奪うなんてことはしないが、生憎とここは幻想郷。常識が常識であり、もちろんそんな所の住民がまともなわけがないのだから外界の存在が起こり得ないと思っっていることでも平然と起こったりする。

結局なにが言いたいのかといえば、紫から頼まれた薬を持ちかえれなかった場合、朔夜は博麗神社の寶銭箱を盗んだ盗人よりも大変な

目に遭うのだ。

竹林に入ってからもう何度目かも分からない溜め息を吐きながら、朔夜は目の前をふよふよと浮かぶ真ん中に永遠亭と書かれた矢印状の紙に従って歩を進める。

朔夜の能力はとても便利な能力だ。万能といっても差し支えの無い能力。だが、万能故に一点特化の同系列の能力には力負けする。湖の氷妖精チルノに氷結対決をすれば負けるといえば分かり易いだろうか。

んでも以て、ただいま朔夜は絶賛迷子中である。

どうして迷子なのか、んなもん目の前で勝手にグシャグシャになった矢印状の紙見れば、もうコレ迷子になった、いや、迷子にさせられたって思うしかないでしょ。

恐らくはこの迷いの竹林に棲む誰かが他者を迷わせる能力持ちなのだろう。だから朔夜の能力が押し負けた。餅は餅屋。

しかし、今まで朔夜の能力が正常に発動していたのを鑑みるに、朔夜はこの能力持ちに改めて能力を使われた可能性が高い。そしてここで重要になってくる問題は、その能力者が敵であるか否か。

切に永遠亭の一家であることを願うが、この竹林は魔法の森並みに妖怪が多い。多いということは珍しい能力持ちが居てもおかしくはないということだ。

ああ、帰りたい。帰りたいけど帰ったらスキマツアー。帰れない。帰れるわけがない。いつそのこと家出してしまおうか。いや、それだと今度は藍姉さんが紫姉さんに代わるだけだ。どうしましようにうしましように、力無き狐は食いものにされるだけなのだろうか？

「いや、でも狐と兎なら狐の方が上位の存在だよな…」

どうなのだろう？幻想郷だからそんな常識簡単に覆ってしまうのだけれど。

「知らないわよ、そんなこと」

「ううん？おお、よかった。永遠亭関係者だった」

後ろを振り向けばそこにはウサミミ制服少女がひとり。

ついでに、このウサミミから強く力を感じる事から朔夜を迷わせているのはこの赤眼のウサ子なのだろう。

「ん？なにアナタ、何処か怪我でも…はしてなさそうだから、誰か怪我でもしているの？」

「いあいあ、俺の身内が酷い二日酔いでね。その薬を貰いに来たんだ」

「ふうん…。まあいいわ。案内するから、ちゃんとついて来なさいよ」

興味なさそうに、素っ気なく言うウサ子。

なぜだか、ピーターラビットの成れの果てを思い出してしまったが、いくらウサミミがついているからといってヒトガタを食う気にはなれない。まあ、赤狐の記憶で食ったのを覚えているけれど、さして美味しくもなかったし。

「…今、もの凄く身の危険を感じるのだけど」

「兎のパイって、食べたことないんだよねえ」

ウサ子が無言のまま足早になってしまった。パイよりも鍋の方がよかったのだろうか？そもそも兎の調理法なんて、あんまし知らないぞ。

そんなこんなで兎の調理法に頭を捻っている内に永遠亭に到着した。かなり大きな屋敷だけれど、庭とか床下から竹が生えてきたりはしないのだろうか？朝起きたら目の前に竹とか笑えないんだけど。

「師匠から薬を貰ってくるから、そこで待ってて」

「ん？ああ、うん。できれば領収書が欲しい」

「分かった」

ウサ子がウサミミを揺らして奥に行ってしまった。

まず第一に敷地に入れてくれた事自体が驚きだが、ちらりと見えた庭に竹が生えてなかったことはもつと驚いた。

そして第二、第二のウサミミが現れた。

「気持ち悪いねえ」

第一のウサミミは縦長で立っていたが、今度のウサミミは丸くて垂れている。

ピンクのワンピースの似合う10歳前後の少女だが、その首から下げているニンジン型のアクセサリは兎のアイデンティティなのだろうか。

「初対面でいきなりそれはないと思う」

「いやいや、それは悪かったね。私は因幡てゐ。一応この竹林の管理者っぽいことをしたりしなかったり」

「へえ。それで、何が気持ち悪いんだ？」

「初めから最後まで。いやゝ、他人嫌い同士が会つとああなるかね。会話の内容は普通だけど、心がないよね。あれじゃただの情報交換だよ」

「ふうん」

「私が名乗ったのに、君が名乗らなかったのもそうだよ。もっと楽しく生きればいいのに」

「それは先輩からのアドバイス？」

「年寄りの暇つぶしさ」

「へえ」

プツリと会話が途切れる。どうもこういう手合いは苦手だ、いつの間にか相手の土俵に立たされている。

だから会話を終わらせたのだが、何故かこのウサミミ二号はこの場に留まっている。ちらりと視線を送るが、ただただ楽しそうに頭の後ろで手を組んでいるだけ。紫姉さんとはまた違った種類の胡散臭さがある。

見た目が幼いというのもあって、きつと騙される奴は後を絶たないだろう。いや、そもそもこの竹林に訪れる奴なんてほとんどいないのだろうけど。

「お待たせ、ってなんでてゐが居るのよ」

「暇つぶし」

「あ、そ。はいコレ」

「ああ、ありがとう」

礼を言ってから代金を渡す。ウサ子は中身を確認すると一度頷いて永遠亭に戻っていった。

「じゃあ俺はこれで」

「うん。君がいつかいい酒呑み仲間になることを祈っているよ」

自身の首にさげてあるニンジン指で弾いてからニッコリと笑う。本心なのだろうか？ 分からない。分からないからこう答えておいた。

「そうですね」

第5話「逃亡、パンチ、お願い」

幻想の住民で一定以上の力を持っていると能力に覚醒する人妖が多い。だから有力な奴等のほとんどは能力を持っていると言っても過言ではないのだが、稀にほとんど力を持たない存在でも能力が発現することがある。

そして、その能力の中には格上の存在にすら対抗出来得る能力もあるのだ。

例えば、『逃げ切る程度の能力』

例えば、『騙す程度の能力』

例えば、『共感させる程度の能力』

例えば、『誤魔化す程度の能力』

上げればキリがないが、確かに自身の生き方にあつた能力が発現すれば生き延び、あわよくば打破することも可能。それが能力。自身の魂が世界へ及ぼす改変の力。

はてさて、なぜ端からいきなりの能力談義をしたかといえ、ただもうすぐきよが能力に目覚めそうだからだ。

目覚めそう、と言っても感覚的なものだし、しかも他人の事だ。

力量的に能力持ちでもおかしくないような存在が実は能力持ちでなかった、ということもあるし確定的なものではないのだが。こう、なんかがもうすぐだお。と言っているのだから、これは博麗の巫女に優らずに劣る勘に従ってもいいのだろう。

と、授業中の時間潰しに明け暮れる朔夜だが、その時間潰しはポケットの震えで遮られた。

机の影でケイタイを開けば、シャーロックからメールが一件。

『氷のお友達が数日後に遊びに行くことになった。君が守ってやってくれ』

メール故に少々曲げて書かれているが、知っている者には一目でわかる。

まず氷のお友達とかデュランダルしか思い浮かばん。いや、別に友達でもないけどさ。

それと、”守る”というのは文字通りの意味ではなく、作戦時のイレギュラーの排除だろう。約束とはいえ面倒臭いな。

『りようかい。御褒美に期待してるよ』と返すと、『お手柔らかに』と返ってきた。…脳裏にシャーロックの苦笑が浮かぶのはなぜだろう？

それはさておき、ノートに無駄に筋肉質な二ワトリの落書きを書いている内に授業は終わってしまった。最後に二ワトリの背後に星を散りばめてからノートを閉じ、ホームルームを聞き流してから鞆を引っ手繰るように手に取って教室を飛び出す。周りの『ああ、いつもの事か』という視線が気に喰わないが、今はそんなことより一刻も早くこの校舎から脱出せねばならない。時間との勝負だ。

廊下を駆け、階段を飛び降り、急いで外履に変えようとした所で後

ろから軽快な足音。^{タツタツタ}その足音が最後に一際大きな音を残し、途絶える。

「パーンチッ！」

「ぐっふうつつー！」

背中への衝撃。一瞬にして視界は反転、足が天井へ。そのまま勢いは収まらず、綺麗に一回転して胸部および顔面から堅い地面に叩きつけられる。肺から強制的に空気が抜けた所為で少し喉が痛い。喉を擦りながら頭上を見上げると、ロリぼでいのきよさんが仁王立ちでいらっしやいました。

「…きよ。俺、思うんだけどさ」

「なに？」

「さっきのつて、飛び蹴りじゃね？」

「……。朔ちゃん、鼻血出てるよ。ほら、ティッシュ詰めてあげるからこっち来なさい」

「あ、うん。まあいいんだけどね」

とりあえず、きよからティッシュを一枚戴き、それに靈力で『治癒』と書いてから鼻に詰める。

きよは朔夜が鼻血を処理しているのを見届けると、前ならえの最前列を彷彿とさせる両手を腰に当てるポーズをとり、一度息を吸ってからこう言った。

「先に言っておくけど。今日はサボらせないよ。そもそも、SSRの自室はSSR棟にあるんだからサボっても無意味だよ」

「いやいや、そっちの部屋はお仕事用だからほとんど普通に男子寮使ってるぞ？ それに、超能力は未知数故に体調の優れない生徒は休む事が出来る、というものがあるんだが」

「はいはい、そうだね。でも朔ちゃん廊下猛ダッシュしてたじゃん、階段飛び降りてたじゃん、綺麗に一回転してたじゃん」

「最後のはお前の所為だな。…ったく、無駄に靈撃を応用しやがってからに。そもそもなあ、俺はここじゃあGが低いんだ。弾幕も碌に張れないってのに、やる気なんて出てくると思うか？」

「でもその腕輪でそこそこは出せるようになったんでしょ？」

「そこそこは結局そこそこでしかないんだよ」

「むう…。じゃあ私の練習見てよ。いいでしょ？」

「なにがいいでしょ？なのは分かんが、仕方ない…、見るだけだぞ」

「うんっ、ありがと！」

「へいへい」

話も纏まった所でよいしょと起き上がり、鼻に詰めていた赤くなつたティッシュをゴミ箱に投げ捨てる。

血はもう止まっていた。

SSR棟。

調和という文字をコンビニのトイレに置き忘れたかのような空間。それがSSR棟だ。

古今東西様々なモノがグチャグチャに混ぜられ、なんとか安定している様な空間。此处を見るたびに、一昔前の自転車に乗った出前を届ける蕎麦屋を思い出してしまうから、朔夜はここが好きではなかった。うどん派なのだ。

少しか陰鬱な気持ちになりながら先導するかのように前を歩くきの後ろに続き、そのまま階段を上がって4階の自室の鍵を開けて

中に入る。

「さあ、着いたよ」

「えっ…？ ああ、うん。うん？……あるえ？」

「どうしたの？」

「あ、いや。なんでもない。それで、わざわざ部屋まで来て何すんの？練習なら一階でもいいだろ」

「ノンノン。今回は他人に見られちゃあダメなのさ。あ、でも我が愛しの妹燈ちゃんなら大丈夫かな」

「ふむ……………」

腕を組み、アゴで先を促すときよは人差し指を顔の前でピツと立て、ニツコリ笑顔でこう言い放った。

「私を、幻想郷に連れて行ってよっ！」

「だが断る」

間を空けることすら出来ずにそう言ってしまったのは、仕方の無いことだと思っただ。まる。

キツネが6匹

魔法の森。

水気が多く、小さな高低差が多いこの森は複数の小川と小さな滝を創りあげている。

苔類や太い木々も多く、多かれ少なかれ訪れた者達に感動を与えるのが『魔法の森』である。

だがそれと同時に、魔法の薬の材料が豊富だとか、魔法使いの住み易い環境だとか、気付いたら特殊な植物の幻術にかかっていて気付かぬ内に死んでいただとか、そういうのをひつくるめて人間は近づいてはいけない、魔に属するモノ達の森。『魔法の森』ともいわれる。

しかしそんなあまりにも脆弱な人間には不向きな森の、入口から少し奥に入った所。そこにあるレンガ壁に蔦が絡みついた二階建ての家にひとりの人間の少女が住んでいた。

彼女の名前は霧雨魔理沙。自称『普通の魔法使い』。

そんな彼女はいつも通りの魔女服にアレンジにアレンジを加えた結果エプロンドレスみたいになってしまった服を着て、昨日の内にパチュリーが管理している大魔法図書館からちよろまかしてきた魔導書から自身の魔法に使えるようなものを探していた。

実際、魔導書を読むだけならば大魔法図書館から盗まずにその場で読めばいいのだが、魔理沙はそうはしない。何故なら幻想郷で数少ない魔法使いと弾幕ごっこが出来るから。

魔法使いといえば、同じく魔法の森に住んでいる人形使いのアリス・マーガトロイドも居るが、如何せん彼女は争い事を好かない。故に研究して編みだした魔法の実験のための弾幕ごっこに付き合っ

くれないのだ。

本当はパチュリー・ノーレッジも動かない大図書館の二つ名に恥じめ、立派なヒッキーなのでアリス同様争い事は好かない。

まだ家出したばかりの魔理沙は、魔法の森に住み着くようになった当初は今のよう強引に魔導書を盗み、それを止めようとするパチュリーと弾幕を張り合うなんてことはせず、真面目に頭を下げて二人に自分の魔法の実験に付き合って欲しいとお願いしていたのだ。

だが、パチュリー・ノーレッジもアリス・マーガトロイドも魔法使い。

魔理沙のように人間で魔法使いではなく、種族からして魔法使い。研究に生きる種族だ。

故に二人は魔理沙の願いを断ることが多かった。同じ魔法と分類されるが、魔理沙の光と熱の魔法とパチュリーの精霊魔法とアリスの操作魔法は研究内容が違いすぎたからだ。

だから、多少強引であっても、魔法使い御法度の相手のテリトリーを荒らすという危険を冒してでも……。いや、違う。どんなに言い訳を並べても、本当の本音は隠せない。どんな言葉で偽ろうとも、自身の本質は簡単に隠せるものではないのだから。

白状してしまえば、当時まだ幼かった魔理沙は、ただただ単純に『寂しかった』のだ。

まだ親に甘えたかった年頃に家を出た。

魔法という自身の夢を実現させるために、親の反対を押し切って家を出た。

勘当されてしまったけれど、本当は私の事が心配で魔法の森の入口で店をやっている森近霖之助という元霧雨商店の店員だった半妖に私の事を助けるように頼んでいたのを知っている。

知っていたけれど、それでも私は家には帰らなかった。変な所で父親に似ていると、よく言われていたものだが、まったくもって親子とは怖いものだ。

そうして、寂しかった私は寂しさを誤魔化すために、無意識の内に系統は違えど、同じ『魔法』を使う魔法使いと弾幕ごっこをして自分の居場所を探していたように、今となっては思ってしまう。

過去系なのは、自身の精神が成長したのと騒がしい友人が増えたことで『寂しい』なんて思う暇がなくなっているからだ。

ボタン、と分厚い魔導書を閉じる。

魔法を使う者としてまず最初に並列思考を習得したのが仇となったか、無駄な事を考えた所為で魔法を研究する気分ではなくなってしまった。

魔導書を少しだけ散らかっている机の上に置き、短いため息を吐いてから目頭を揉む。

間昼間でも薄暗い魔法の森では昼間でも明りを点けなければいけないから目が疲れやすいのだ。種族が魔法使いになってしまえば長時間読み続けることも出来るのだろう。だが、出来ないし、なれない。前にも魔法使いになろうとしたことがあるが、いざ魔法を発動させようとするとどうしても両親の顔が思い浮かんで出来ない。勝手に家出して、勝手に人間ではなくなってしまったら、あの二人がどんな顔をするのか。そう考えただけで身体が震えて、魔法なんて使えるような状態ではなくなってしまう。踏ん切りがつかない、女々し過ぎる。いや、私は女だけれども、情けないという意味で。

「あゝあゝ……」

おおよそ乙女の出すような声ではないが、一人暮らしだし、人も滅多に来ない、そんな環境ではどんな女でも遅しくなるのだ。色んな意味で。

魔理沙は椅子を傾けながらチラリと窓の外を見る。

風で揺れる木の葉の間から見える太陽は真上を少しだけ過ぎていた。コテンと頭を反対に向け、壁に掛かっている時計を見遣れば時刻は昼過ぎ。

『昼』なんて考えたからだろうか、朝すら食べていないお腹は先程の口とは違って「きゅうう」と可愛らしい音を立てた。

そんな腹を宿めるかのように擦りながら、科学の変態河童『にとり』が作ったにとり印の冷蔵庫を開ける。と、そこで昨日の夕食で食材を全て使いきったのを思い出した。というか思い出さざるを得ないというか、現実を突き付けられたというか。

はぁ、と本日二度目のため息を吐いてから、白いフリル付きだが魔女らしい黒の三角帽子を手取る。

今日は久しぶりの外食か。

玄関の扉の脇に置いてある箒を肩に乗せ、どんなのを食べようかと人里の食事処を思い浮かべながら霧雨魔理沙は三日ぶりに外に出た。

第6話「お断り、湯呑、恐怖」

卓袱台を挟んで湯呑に注がれた熱いお茶を啜りながら、望月朔夜は熟考する。

何かきっかけがあれば能力が開花するかもしれない、というのがきのよの弁だ。確かにきよ程の実力があれば幻想入りすれば能力に目覚める可能性は高い。だが、本当にそれでいいのだろうか？ きよは純正の人間だから朔夜のように外界で力を使い過ぎて強制的に幻想郷に戻されるといふのはありえないからいいのだが。幻想でもない存在が幻想郷と外界を往復するのは博麗大結界に小さな綻びを生じさせる。

いや、管理者である八雲紫のスキマを使えば大結界に影響を与えることもなく通過することも出来るが、仮にも幻想郷の管理者であり妖怪の賢者とも呼ばれるスキマ妖怪がたった一人の、しかも外界の人間のために動くとも思えない。

それに藍姉さんも言っていたではないか。『なあ朔夜。私はこの八雲家の家事を一任されている。だからこそ今日分かってしまったのだが、どうも私の中でも紫様でもないブラがあるみたいなんだ。朔夜はそんなナリでも男だし、女装の趣味はないから必然的に導き出される答えは、突発的に朔夜が下着から決めていく女装趣味になったのか、それとも…、ツク…！ 認めたくはないっ、認めたくはないが…ッ、私の愛しい橙が自ら購入したのかの二択になってしまった。…なあ朔夜、これが最近少し余所余所しくなった橙が心身共に成長した物的証拠であることを認めたくないのは分かっている。だが、だがしかしッ！ だからこそ、私はこう思いたい、思い込みたんだ…。…朔夜、とうとう女装趣味に目覚めてしまったのか…』

いや、間違えた、『八雲は幻想でありながら幻想を管理する、故に全てを敵に回しても幻想郷を守るためならなんだってするのさ。例え、最愛の者に怨まれようと…』だった。

つまり、幻想郷の存続こそが如何なるものよりも最優先であり、幻想郷に害を成すモノは如何なる状況下であつたとしても全力を以て排除する、という事だ。

だから、もしきよの能力が幻想郷の要である博麗大結界に何かしら作用するモノだった場合、八雲はきよを排除するだろう。スペルカードルールなど従わず、妖怪らしく、その命を奪うだろう。

もしきよの力がもう少しでも弱ければ、発現する能力もフランドールやその兄のように危険なモノである可能性も低かった。しかしきよは蘆屋の血統において最強といわれるほどの人間だ。そしてなによりきよは魂が強すぎる。

だから、もし幻想郷にきよを連れていけば、幻想郷で能力が発現すれば、朔夜は朔夜の家族によって自身の愛する人間を殺される。

しかし、逆もありえるのだ。きよの能力がもし幻想郷に益となるモノだったら…。

そんな希望的思考に辿り着き、朔夜は慌てて頭を振ってその考えを追いだした。それに、能力は便利でありながら、自身の身の丈に合わないモノだった場合は能力がその宿主を喰い殺す。

春雪異変の犯人である西行寺幽々子は、異変の後に少しだけ思いだした生前の記憶を朔夜にだけに語ってくれたことがある。

彼女は生前、死霊を操る程度の能力の能力を持っていたらしい。それが庭にある西行妖という妖怪桜が原因なのか、はたまた別の原因なのかは分からないが、死を操る程度の能力に変化し、その強すぎる能力故に自身を食い殺された、とのことだ。

そして、死んだ幽々子を生前から友人関係がった紫が幽々子が死ぬと同時に満開となった西行妖の封印に幽々子の亡骸を使うと同時に幽々子を亡霊にした。しかし亡霊になった幽々子には生前の記憶がなかった。だから、亡霊である西行寺幽々子の最初の記憶は見知らぬ金髪の女性の、泣き笑顔だったそうなの。

と、能力が強すぎたために制御しきる前に死んでしまった前例があるため、きよを幻想郷に招いて急激な能力の開花させるのはしたくないのだ。

だから、

「ごめん」

「…どうしても？」

「…ごめん」

「そっか」

謝る朔夜の心中を察したのか、それとも朔夜に全幅の信頼をおいているのか、きよは朔夜が思っていたよりもあっさりと退いた。

「うん、無理言つてごめんね？」

「いや。でもきよの能力はもうすぐ開花しそうだと思う。妖怪のもうすぐだから人間には少しばかり長すぎるかもしれないが。ああ、えっと…」

「ふふ、大丈夫。別に、能力がなくてもいいもん」

きよが落ち込んでいるかと思ったのか、取り繕うかのように湯呑を弄りながら言う朔夜を見て、きよは嬉しそうに微笑んでから強気にそう言い放った。

そんなきよを朔夜はポカンとした表情で見詰めていたが、すぐにこ

ちらも嬉しそうな笑顔に変わった。

「そうか」

「そうだよ」

柔らかくなった空気の中、二人してまったりとお茶を啜る。

そんな心地良い充足感に満ちた沈黙はきよが自室に帰るまで続いた。

湯呑を片付けた後に帰っていったきよを見送り、今日はこっちの部屋で寝ようかな、なんて迷っていると、ふと疑問に思ったことが口を吐いて出てきた。

「……あれ？なんできよの奴俺の部屋の鍵持ってるんだ？」

思い返せば、男子寮の方の鍵も持っていたような気がする。しかも今日なんか当たり前の如く俺の目の前で部屋鍵使ってなかったか？こっちの鍵は商売道具があるから世界でたったひとつの特殊なものを使っているのだが……。

あれ？あれ？なんだろう、何故だかものすごく怖い。

少しだけ残っていたお茶が、普段より濁って見えたのは、気のせいだと思いたい。

キツネが6匹（後書き）

まったりとした雰囲気を書きたいなあと思って書きました。

前半のイミフな文字列は幻想郷の少女達の、幻想的な闇を書きたいなあ。と思って書きました。

さて、好き勝手書いたから次にどう繋げればいいのか分からないぞ
：

キツネが7匹（前書き）

申し訳ない。彼女は戦争妖精という小説を読んでいたりとかしていて更新が遅れやした。

追伸：

文化祭に食べた松屋の牛丼はとても美味しかった。

キツネが7匹

世の中、いろいろな理不尽が転がっている。

機嫌の悪かった上司の八つ当たりで普段なら以後気をつけるようにと言われるだけの些細なミスをそれはもう烈火の如く怒られたり、通勤時の電車の中でいきなり腕を掴まれ「この人痴漢です」と宣言されて訳も分からない内に朝っぱらから周りの男共に取り押さえられて次の駅で降ろされたり、ちよつとだけ無理をして早めに仕事を終わらせて疲労困憊で家に帰って来たら妻が家事を手伝えたのなんだのとか。

あれ？なんで世の中のお父さん方の愚痴ばかりなんだ？ まあいいんだけどさ。

とりあえず、世の中には理不尽な出来事がある。

そこで理不尽とは全く関係ないけれど、俺が過去に体験した家族の小さな成長の物語を綴りたいと思う。

アレは俺がまだ「人間関係を学べ」と外界に追い出される前の、どの書物にも書き遺されていない、とても小さな、しかし当人達にとつてはとても大きな異変である。

事の発端はいつも側にいる者であってもおかしいと断言できるような確固とした変化ではなかった。

しかしその一家は彼女のどこかいつもとは違うナニカに気付き、僅かな違和感を感じとっていたのだ。だがソレは小さすぎる違和感だった故にその一家は見逃してしまった。もし、この時この違和感の正体に気付くことが出来ていたら、円のようだったその一家の関

係に角が出来る事もなく、その角を修復するのに博麗の巫女が動く事になることもなく、酒片手の笑い話にもなったのだろう。

ある日の朝、朔夜が顔を洗ってから居間に行くといつもならまだ寝ているであろう橙^{チエン}が湯呑を片手に頬杖をついて雲一つない真っ白な空を眺めていた。

朔夜は彼女が朝の挨拶を化け猫特有の二本の尻尾をゆったりと揺らして返してきたことに苦笑を浮かべながら蒼い狐火で自身のお茶を沸かすとゆっくりと湯気を上げる湯呑から熱いお茶を啜った。卓上には湯気を上げる湯呑と冷めてしまったのであろう湯呑がひとつづつ何を言うまでもなく、注がれた液体を今日も今日とてその使命を果たすが如く溢さずに鎮座していた。

やがて、朔夜の横にスキマが現れると中から金髪の美女が貞子よりしくな格好で這い出てきた。

彼女こそがこの家の家主にして妖怪の楽園である幻想郷の管理人、八雲紫。妖怪の賢者と呼ばれる彼女であつたが、外では自身の内心を悟らせぬように気を張っており、それ故に胡散臭いなどと言われているが、その反動か、元々なのか彼女は家の中では誰よりもだらしかなかった。

その証拠に起きてすぐスキマを使って居間に来たであらう寝癖でぐしゃぐしゃになった髪、口元には涎の跡すらあるのだから顔すら洗っていないことが分かる。藍ならばそんな自分の主を見たらビンタでもして目を覚まさせるのであろうが生憎とその藍は只今朝ごはんを作っている最中であるし、橙も朔夜も紫を起す気など微塵もなかった。朝の紫はそれほどまでに面倒臭いのだ。

結局、二人は急に現れた紫を一瞥しただけで何をするでもなく、ぼ

うと呆けたまま焦点すら合っているのか分からない瞳で何もない空間を眺めていた。

しばしそうやって無駄に時間を潰していると藍が朝食を運んできた。もう数百数十年と続けたその動作に淀みはなく、手早く無駄に洗練された動きで支度を済ませながら自身の主を蹴り起こすという荒技までもやってのける。別にそんなことに痺れも憧れもしないが、吸い込まれるように紫の鳩尾に突き刺さった爪先に一切の迷いがなかった事だけは流石だと思えた。

朝食を食べ終え簡易式神に食器洗いを任せた藍は普段通りに食後のお茶を入れようとしたのだが、いつもよりひとつ少ない湯呑に眉を寄せた。

「橙、お茶はいらないのか？」

「え？あ、うん。私はいいです。ごちそうさまでした」

橙は自分の簡易式神で湯呑を台所へ持って行かせると、足早に自室に戻っていった。

そんな橙の行動に少し驚きながらも、熱いお茶を淹れた紫専用の湯呑を漸く目が覚めてきた主の前に置いた。

「ん。何かあったのか…？」

「ずず…。ふうん？ま、いわゆる親離れ、ってところでしょう」

「お、おお親離れですかッ!？」

「熱っ！　ちょ、藍姉さん、俺の湯呑がフジヤマヴォルケイノしちよる!？」

「あ、ああ。すまない朔夜。それで紫様、親離れってどういうことだコンチキショウ!」

「ほら、それはアレよ。貴女だってそうだったじゃない。式になっ

たばかりの頃は四六時中私の後を追いかけてたけど、いつの間にか一人で結界の調節まで出来つようになって、終いには自分の式^{しき}まで連れてきたし。うう、お母さんは寂しいわ……」

「心配しなくても大丈夫さ、なんたって俺が居るから。ね、紫おばあちゃ——」

朔夜がログアウトしました。

「では橙が私の元から旅立ってしまうのは確定事項なので!？」

「そうね。貴女という前例があるのだから、きつとそうなんでしょうねえ。でもほら、親離れは成長した子どもが親との距離を再確認しているようなものだから。普段通りにしていればいずれ元通りになるでしょ。少し違った形になるのは仕方がないことだけれどもね」

「そう、ですか……」

「橙至上主義の貴女にはツライと思うけど、変に手を出したら余計に長引くからね。間違っても橙と一緒に風呂に入ろうとしたり、断られたからって覗いたり、夜這いが如くこっそりと添い寝をしたりしなければいいのよ」

「そ、そんな……。そんな殺生なッ! 橙と一緒に風呂に入れないなら、橙のお風呂を覗けないのなら、寝ている橙を愛でることが出来ないのなら、私は……私はどうやって生きていけばいいんですか」
「知らないわよ、そんなこと。というか本当にお風呂除いてたのね……」

ウガー、と畳を転げ回る藍をやや冷えた瞳で見据える紫、ととにかくにシユールな光景がそこにはあった。

はてさて、そんな珍妙な光景も朔夜が顔を真っ青にしながらもスキ

マからなんとか無事帰還したことによって仕切り直された。

仕切り直されたといっても座り直しただけであるし、話も朔夜がスキマツアーを強制体験させられている間に大方終わっていたので、朔夜はまだ淹れたばかりのお茶を堪能することにしたのだった。

そしてそんな橙の行動から半月ほど経ったある日、朔夜は今日も今日とて博麗神社マコトに来ていた。

「なんだか今、すごく失礼なルビを振られた気がするわ」

相変わらず勘の鋭い霊夢に朔夜は表情も変えずにヒラヒラと手を振って応えた。

「はあ。んで？ アンタんとコの猫がなんだって？」

「いや、俺にもよく分からんのだがな。紫姉さん曰く親離れの時が来たらしいんだ」

「んなの、親なんていない私に分かるわけじゃない。魔理沙は…両親は生きてるらしいけど、どうもその話はダメみたいだし。そもそも私は私の知り合いの親なんて見たことない。だから親離れの気持ちも子離れの気持ちも知らないし聞けないわ」

「ほおん。アレ？じゃあ博麗の巫女ってどうやって継いでいくんだ？ お前がどつかの男に惚れ込むなんて想像も出来ん」

「さあ？私だって女なんだから結婚でもして自分の子どもに博麗を継がせるかもしれないけど、先代も先々代も自分が老いを感じたくらいでティンとくる子が見つかって、その子を連れてきて博麗を継がせたらしいわ」

「それって拉致じゃね？」

「親がいたらそうかもね。でも、弾幕ごっこが主流になったとはい

え孤児は多いもの。この間夜雀の屋台で死神が愚痴ってたけど、妖怪に殺される人間ってまだまだ結構多いらしいわ。仕方ないと言えば、仕方がない事なんでしょうけども」

ずず、とお茶を啜る霊夢を眺めながら、話がいつの間にか変わってんな〜とかも思いつつ今の幻想郷の状態を考えてみる。

確かに霊夢の言った通り、弹幕ごっこが主流となったとはいえ人間を妖怪らしく襲う妖怪が居なくなっただけではないのだ。特に弱小妖怪なんかは弹幕を張る妖力もないために人間を喰って力を付けようとしている節が見られる。一般人なんか美味しくないのに…。

その点霊夢は随分と美味いことだろう。なんたって博麗の巫女に選ばれるほどだ、美味くないハズがない。まあ食べようとしても霊夢に勝てないだろうし、勝てたとしても妖怪の賢者がそれを許すとも思えない。いやでも指の一本くらいなら…。

と、視線が湯呑の指に移った途端に夢想封印をいただくことになった。勘が良過ぎるのも考えものだと思う…。

「私を指一本でも食べてみなさい、弹幕ごっこも関係なしにドタマぶち抜いてやる」

「ごめんなさいでした」

土下座をする一瞬に俺の後目に映った彼女の目は本気だった、とだけ言っておこう。

さてさて、指の一本すら食べさせてくれないのだから賽銭も少ないのが道理な霊m——。

——あ、ちよつ、本当にごめんなさい！イタ、イタタタ！潰れる潰れるうつ、クソっ結界をこんな風に使いやがってからに…！あつ、

ウソウソ嘘ですよ、俺がそんなこと思う訳ないタタタ！本当にヤメテ、内臓的なモノが口からフィーバーしちまうッ！？

数分後、私の手も賽銭箱と同じ効果があるのよ？とかのたまいやがる巫女様に丁寧に賽銭をお渡しして荒ぶる鬼神を治めてもらった。いや、荒ぶる鬼神がその巫女様な訳だけど口にしたら今度は閻魔が出てくるから止めておく。説教も嫌だが暴力に訴える閻魔はもっと嫌だ。

さてさてさて、仕切り直し、と拍手を叩いてから霊夢に改めて相談を続ける。

「で、だ。橙の事なんだが、同じ女としてなんか心当たりはないか？丁度橙も人間の年齢に換算したら霊夢と同じくらいだろう？」

ううむ、と霊夢はお茶を一口啜ってから顎に手をあて眉根を寄せて唸ったみせた。

しかし空いている片手がお茶請けの煎餅を掴みに行っているから大してマジメには考えていないのだろう。ブレないなあ、霊夢は。

「そつえば、この二、三年で胸が膨らんで来たような…」

胸、胸か…。

犬と言われれば無意識に犬を想像してしまうように、自然と朔夜の視線が霊夢の胸に注がれる。

「…はっ」

「よし、表へ出るボケキツネ」

「おう！？おおっと、落ち着いてくだせえ霊夢の姐御。紫姉さんも藍姉さんも大きい方だから、どうしても膨らみ始めたばかりの胸

は小さく見えちゃうんですよ。大丈夫大丈夫、あと二年か三年もすれば胸を張れるくらい胸が大きくなるさ」

「…まあ別に、大きくなくてもいいんだけどね。なんでも丁度いいってモンがあるんだし」

「そこらの妖怪をオーバークイルする霊夢さんがそれをいいますか。感動で涙がちよきれそうだ」

「あははー、なんだかムソーテンセイをうちたくなってきたなー。なー？」

「……さて、冗談もここまでにしよう。ええと、なんだっけ？魔理沙が変なキノコ食べてロリ沙になった話だったっけか？」

「違うわよ。竹林の焼き鳥屋が夜雀の屋台に襲撃をかけた話」

「ああ、ああそうだったな。橙の様子がおかしいって話だったな。それで、胸以外で他になんかないか？」

「うーん…。ああ、一年くらい前から血が出るようになったわ」

「……………」
「なによ？私に血が流れていないとでも思ってたの？」

「……………」

「目を逸らすな。なんていったかしら…、ああ、確かゲツケイ？なんでも子どもを産むためのナンチャラだとか、って紫が言ってた」

「ああ、それで…。数週間前に紫姉さんが嬉しそうに霊夢が私を頼ってきた、なんて言ってたのか。まあなんにせよ、霊夢としては無駄になりそうな機能だな」

「機能とか言うな。でもまあ、男に組み敷かれるっていうのも癪だし、実際使わないと思うから別になくなってもいいのよねえ。血の処理がメンドウだし」

「うん？紫姉さんから生理用品とか貰ってないのか？」

「…ないよソレ」

「いや、外界のメスが使ってるヤツで、結構楽になるって前に姉さん達が言ってた」

「ふうん、そう。…ってアンタなにナチュラルに乙女の秘め事を聞

いてんのよ。マナー以前にセクハラでボコすわよ？」

「はあ？そつちこそ何言つてんだよ。たかだか血が出た話くらい聞いてもいいだろ」

「……アンタ、外界にまで家出して何学んできたのよ」

「人間の殺し方」

「それ以外は？」

「脳ミソを弄つて情報を吐かせる技術とか？」

「……ふう、どうやら神社に悪い妖怪が迷い込んでいたみたいね」

「え、えっ？マジで？ええと、ええと……クツ、サラダバー！」

ぼわん、と白煙と共に姿を消す朔夜。

しかし朔夜はまだ知らない。霊夢とこんな話をしたばかりに霊夢から紫に情報が伝わって外界に放り出されることになるうとは……。

ふいー、と毎回の如くグダグダになってから八雲邸に逃げ帰って来た朔夜はかいてもいない汗を手の甲で拭うと、小腹を満たすためにキッチンに向かった。

「あれ、藍姉さん？ どうしたんよ？」

呆けたように虚空を見つめる九尾狐が一匹、そこにはいた。

まだ夕飯を作る時間でもないし、何かをしていた様子もない。とりあえず反応のない藍姉さんの目の前で手を振ってみるとやっと気付いたのか目を丸くして顔を後ろに退いた。

「……えっ？ あ、ああ、朔夜か。どうしたんだ？」

「姉さんこそどうしたんだよ？」

「いや、なんでもないんだ。そう、なんでもない」

「ふうん？　ならいいけど。ところでなんか軽くつまめる物ない？　ちよつと腹減っちゃって」

「ええと、…ふむ、油揚げくらいしかないな。食べるか？」

「え？　いいの…。いや、やっぱり晩ご飯まで我慢することにするよ、うん」

そんな親の仇を見る様な目で差し出されて食える奴は博麗の巫女か紫姉さんくらいだろうよ。

そうか…。とホツと息を吐いている藍姉さんにジト目をプレゼントしてから、自室に向かう。自室に行ってもする事なんて読書か術の研究くらいしかない。暇潰しの博麗神社はさつき逃げ帰って来たばかりだし、竹林の三角関係 + α には巻き込まれたくない。紅魔館はマッドな魔法使いがいるし、彼岸は小町とは仲がいいが山田の説教を喰らうのは御免被る。

む、こうして考えてみると俺って結構普段から暇な友人がいないな…。

魔理沙は…いや、なんか研究してたからダメか。

文に会いに行ってもその番犬と他の天狗に追り返されるし……。あ、そうだ。冥界に行こう。

と、いうわけで冥界にやって来たのだが、誰も居ない。庭師の妖夢は買い物とかでよく居ないのは分かるが、その主である幽々子まで居ないということは紫姉さんと何処かに遊びに行ったのか？　それに妖夢は巻き込まれた、と。

「はあ…」

しかし本当に暇になったな。

ここはもういつその事チルノと遊ぶか？いや、でもアイツ普段からバカのフリしてるだけで、認知度は極度に低いけど幻想郷の一角を担ってるような奴だから、自分の本性知ってる奴等には容赦ないんだよね。一度氷漬けにされたし…。

あゝあ。暇だなあ…暇だな暇だな暇だなあゝ。

外界のネカフェでも行つてこようかな。

コスプレすれば三割引きにしてくれるし…。あれ？よくよく考えれば幻想郷の奴等って外界の奴等から見ればほとんどがコスプレしてるって思われるんじゃない？ かくいう俺も外界風に言えば化け狐コスってことになるんだろうし。

ま、いいか。

この時、俺が外界に出かけずに家で本でも読んでいれば、もしかしたら事態はもうすこしはマシになったのかもしれない。

第七話「能力、喧嘩、愛しい呪い」

結局、きよを幻想郷に連れていくという話はなくなつたが、きよは幻想郷に行くことを諦めていなかった。

俺はすっかり諦めているものだど油断していたのだが、後日暇潰しに簡易式同士のテニスをやっている所に意気揚々ときよは現れた。因みにその時の御言葉はコレだ。

「ねえ朔ちゃん。能力が分からないから行けないなら、分かるようにすればいいんじゃないかな」

そんなことで簡単に自身の能力が分かるのなら、幻想郷の住民は人妖1匹残らず能力持ちであるだろう。

なのでどれだけ能力を発現させるのが困難なのか、能力は自然に発現させるのが一番の近道なのかを小一時間説いてやったのだが、ソレに対していった御言葉テイク2はコレだ。

「一番の近道は確かにソレなんだろうと私も思うけれども。それでも朔ちゃん、朔ちゃんの事だから裏道くらいは知ってるんでしょ？」

思わず絶句してしまった。なぜなら、確かに裏道が存在するからだ。女の勘というモノは時として博麗の巫女にも匹敵するのだ、と戦慄を覚えたのは記憶に新しい。

そんな俺の様子を見て裏道があることを確信したきよは、それはもう凄かった。筆舌し難いほどに凄かった。教えてくれなきゃ刺してやる、と霊力を纏わせて冗談無しでまな板ごと斬れる程の切れ味になった包丁を向けてくるとか、子どもみたいに床に倒れ込んで手足を振り回しながら霊撃を連発しまくったりと、その他いろいろな手段を用いて俺から裏道を聞きたがった。

紫姉さんが張った結界の中が全て消し飛ぶまで暴れたきよは暴れるだけ暴れた後、不貞寝した。それでも能力で造り出した布団にはちゃんと入る所とか、自作した札など総額2億は下らない価値のモノ

達が文字通り消し去っても、どうしても可愛いと思えてしまう時点で俺はもう末期なのだろう。

そんな末期な俺でも裏道を教えない理由。その裏道は危険すぎるのだ。人間の命なんて容易く散ってしまうほどに。

言葉で説明するなら、他者が——この場合俺が——きよの精神に潜り、きよの精神を攻撃する。すると、精神は本能で構成された自衛本能、つまりは能力を使って俺を排除するわけだ。

妖怪や不死者など、殺しても死なないような強靱な肉体と精神を持つ存在ならば、失敗しても一年程度体中に違和感が残るくらいで済むのだろうが、そんなモノと比べたら如何せん人間は壊れやすい。

指で突けば簡単に瓦解し、その壊れた一部から全てが崩壊する。

だから俺は、絶対に教えない。例えどこかできよがその方法を知ったとしても、俺は絶対に手伝わないし、呪いという鎖で縛り付けてでもさせない。

と、いうわけで。しろとしないの反意見を持った二人こと、俺ときよは絶賛喧嘩中というわけだ。

そして今日も含め、不貞寝の翌日に喧嘩をしてから既に四日経ったのだが、一言たりとも会話を交わしていない。

……………心が折れそうだ。

その日、蘆屋きよは久しぶりに妹の燈アカリと昼食を共にしていた。

「……………で？」

私が朔ちゃんと喧嘩している理由を愚痴り終わると、燈はたつぷりと時間をかけてそう言った。

「で？　って、何が？」

「はあ。本当に、ほんつとうに！　分かんないの？」

「う、うん」

讃岐うどんから離れた端が眼前に勢い良く突き付けられて、ややドモリながらも答えると燈は隠す事もせずに、まるで「もううんざりだ」とでも言いた気に溜め息を吐いた。

「姉さん、この際だからハッキリ言わせてもらっわ」

「ハッキリ？」

「そう、ハッキリと、キツチリと、バツチリと言わせてもらっけど、姉さんが自分で愚痴だと思ってるソレは、他人から聞けばどこからどう見ても360度惚気話でしかないわ」

「そ、そんなことないよ。だって今、け、喧嘩中、だし……」

「はああああ………。ああ、もうっ！　喧嘩中って言葉を口に出すだけで落ち込むような奴が、その歳不相応に可愛らしいお口からナチュラルに砂糖を垂れ流してないとしても思ってるわけですか！？」

「お、落ち着いて燈。お箸に付いた汁が飛んでるよっ」

「うるさいうるさいうるさい……い！！　この天然精神的砂糖量産型合法幼女めっ、もう一度小学校からやり直させてやろうか！？」

小学校からやり直す？

「それはどう考えても無理だよ、燈」

「うわああああん！ 真顔で言われた！ 見た目が見た目だからもの凄く腹が立つっッ！」

「それより燈、早く食べないと冷めちゃうよ」

「だ、誰の所為でそうなったとッ！？」

「ッ！？」 …… もしや、もしや燈はうどんを一日置いてから食べる派の人なの？ 実は私もそうなんだ。流石に一日置いたためだけには作らないけれど、残っちゃったら一日置くよね？ ってアレ、どうしたの？」

「姉さん」

「なあに？」

「お願いします。一発でいいんです、一発だけ殴らせて下さい」

「え？ ヤダよ」

燈はピシ、と一瞬固まったかと思うとうどん残っているトレーを返却口に持って行ってそのまま戻ってくることはなかった。

「あ、あれ？」

私はまた何かしてしまったのだろうか？ 朔ちゃんのクラスメイトである理子ちゃんが前に私は笑顔で心を抉ってくるとか言われたけど、私にはよく分からない。そもそも、長いあいだ精神的に二人つきりだったから他人がどんなことを言えばどうな風に傷ついてしまふとかが分からないんだ。

「はあ……」

自身の社交能力の無さが恨めしい。

内心で愚痴りながら、少し伸びてしまったラーメンを箸でクルリと回した。ぐるぐると回る麺とそれに追従して回るスープは何故だか自身の心情を現している様に見えてしまって、少しだけ陰鬱な気分になった。

「はあ……」

そもそも、と自身がこんな状態になっている原因を振り返ってみる。思い浮かぶのはまるで子供が泣くのを我慢しているような雰囲気では必死に否定してくる朔ちゃんの顔。

朔ちゃんが、私にいじわるで能力の発現方法を教えないわけではないことは分かっている。分かつてはいるが、私はどうしても能力が欲しかった。

安倍清明様の再来とか生まれ変わりだとか言われていても、幻想郷の住民から見れば良くて中堅クラスだと、朔ちゃんのお姉様は言っていた。だから、私はそれまで以上に自分の異能を磨いた。鍛練に鍛練を重ね、修行に修行をして、実家の蔵書を読み漁って、朔ちゃんの隣に立とうとした。

それでも……

「……………ダメなんだよ」

お姉様が私に見せた力は、私に私の矮小さを突き付けた。煌めく光弾が、視界を埋め尽くす弾幕が、地面を抉り岩を砕くその力が、どうしようもなく私の小ささを認識させられた。

そして、それ程の力を見せておきながら、まだほんの一部でしかないと言う。

言葉を失った。

実力差に、自身との格の違いに、そしてなによりも、自分が愛する男が、自分と違う世界に生きていたことに、言葉を失った。

それでも、何か言葉を、自身の心を吐き出そうとして。 だけどソレは喉元で詰まった。 他ならぬ、お姉様の言葉によって。

『朔夜は確かに貴女を愛しているわ。 それこそ自分の命を差し出してでも貴女をありとあらゆるものから守ろうとするでしょう。』

一字一句違わずに思い返せるその言葉は、

『だから、貴女は強くならなければならない。 なによりも、貴女を愛する朔夜のために。 　　そうして、貴女があの子と同じ場所に立てるようになったなら、きつとあの子も——』

今でも私の心臓ココロに突き刺さったままだ。

「……………」

ふと、瞼のうえから右目に触れる。

意識を集中してやれば途端にジユクリとした熱を持つこの愛おしい呪いが、いつの間にか早鐘を打っている心臓をゆっくりと宥めてくれた。

この前は子どもみたいに暴れてしまったけれど、今度は落ち着いて、ちゃんと話してみようかな。

どうしても緩んでしまつ口元を改めることもせず、伸びきって冷め

てしまったラーメンを嚼つた。

「うへえ。おいしくない……。おいしくないけど、これはこれで……」
いいかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7846t/>

幻想キツネが緋弾でありやりや（仮）

2011年9月20日17時57分発行